女學雜誌

一冊六錢

各土曜日發兌

第貳百號

當府內無郵稅

郵稅五厘

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 200. 15TH FEBRUARY. 1890.

EDITORIAL :—How much shall we pay for the Utterance of angry Patriotic Thoughts. Several Objections with regard to the Abolition of Licensed Prostitutions.

LEADING ARTICLES :—Concerning Poetry.

CRITICAL NOTES :—Dr. Belt's "Abuses of the Education of Girls."

MISCELLAOEOUS :—Complaints of a Wife. How to read Japanese Poems. A Vegetarian's Explanation. An unclean Garden. Food for Infants. Rain water and Snow water. Children killed by impure Air.

NOVEL :—The Story of Innac Ardene.

CONTRIBUTED ARTICLE :—Literary men and Lawyers.

OPEN LETTERS :—

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百號目錄

社説　慷慨の價値𠕇文錢ぞ○廢娼論に對する種々の異論(一)

論説　詩歌を學ぶの効川(霞峯子)

批評　ベルッ氏女子教育上の弊害○小學毛筆畫○當世批評家

雜錄　閨の怨(蓮峯外史)○和歌讀み方(鈴木弘恭)○東京府下名醫の栞○節分○野菜會員の辨解○きよめぬ庭○小兒の食物○雨水、雪水○惡しき空氣小供を殺ろす

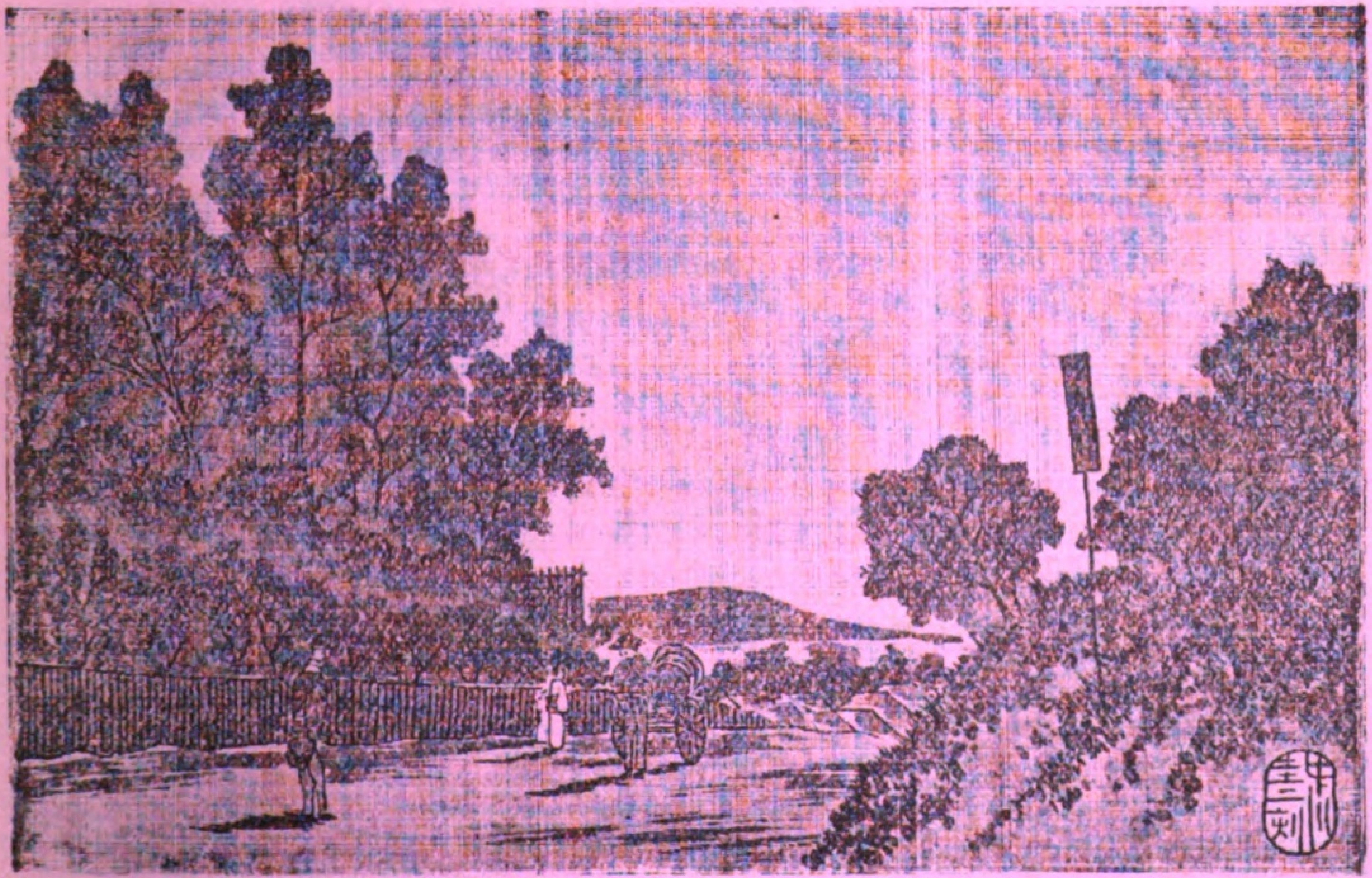
小説　イナック、アーデンものがたり

寄書　文學者と法學者○詩五首(柳溪女史)

開書　食客と獻身者との事○女學雜誌の一失○突詢

時事　佛教家及廢娼運動○下宿事業○授産事業○衛生事業○矯風事業○縫箔ハンケチ○廢娼記事○廢娼論料

女報　婦人衛生會○同志社の爲めの演説會○山縣伯爵夫人○高等女學校長○田中伊與子○東京産婆會○高等女學校撿定委員長○外國婦人女子技術學校○産婆學校万國監獄會議○大日本帝國水難救濟會○清國公使夫人



Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

母ともよか　なくからす
兄をつれてか　ゆく雀
いざやかへらん　われもまた
母はかどべよ　まちたまふ。
兄はをくれて　いづこよや
細枝をらなん　みちしるべ
きこゆる笛は　かのひとの
われをよぶとか　こえかなし。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌第二百號

明治二十三年二月十五日發兌

社說

○慷慨の價値何文錢ぞ

量狹し膽小さしと評すれば人沸然として怒る、之を大和魂しひあり慷慨家なりと評すれば其人揚々として自得す、然れども吾人を以て之を見るに、今の慷慨家なり大和魂しひありと云ふものは只だ是れ狹量小膽者の別名なるのみ、之を詮じて到底未だ其効驗を得ず。

大和魂しひとは抑そも何如なる魂ひにてある乎、上帝日本人を造り之に賦するに特に一種の靈魂を以てせし乎、我國未だ心理の學に達せず不幸にして尙ほ其の靈魂の何物なるかを論窮し得ざるを憾らむ、然れども密かに其魂しひの稟質とする所ろを聞くに、云く命を擲つて顧みざるにあり、云く利を棄てゝ念はざるにあり、云く國家を念とし忠孝に祈り潔化芳名に望むにありと、然らば則はち是れ犧牲獻身の覺悟にして私を棄て公に就き邪路を去つて仁義大道に歩むの敎へに外ならず、此の如くんば是れ孔子の敎ゆる所ろにして支那人の奉ずる所ろ、基督の說く所ろにして亦た西洋人の守る所ろなり、安んぞ唯だ日本人に限るの日本敎ならんや、左らば之を人道と稱し、之を守るを人の魂しひと云ふは可なり、特に呼んで大和魂しひと云ふに至りては僭越私擅の非りを蒙むると無きにあらじ。然りと云へども、大和魂しひは以上の精神に加ふるに別に愛國の義を以てするありと云はんには、吾人亦更に答ふべし、何人も先づ其身を愛することを知り、次に其家を愛することを知り、遂に其國を愛することを知る、而して何如なる人道も亦同じく此の如く敎導せざるとなし、何んぞたゞ日本に於けるの道德のみ然るならんやと。果して然らば、日本人が特に稱揚するの大和魂しひには抑そも何等新異の妙分子ありや、若し夫れ外國人に對して敵意を含み只管らに日本國をのみ崇め廣く天下を見るの別眼なきを是れ大和魂しひなりと云ふものあらば、吾人は此如き下等なる靈魂の速かに神洲より脫去せんことを祈る。平野二郎の歌に有之、

かくすれば斯なるものと知り乍ら止にやまらぬ大和魂しひ

あゝ大和魄しひにして若し一時激昂の癇情なりと云はゞ、斯る癇情は長しなへに賛ふべきものにあらず。

慷慨とは何の情ぞ、心平ならずして物に憤ふるの情を云ふ乎、然らば彼の非望を懷くもの、滿足を得ず不平恨思して世を怨

むも亦た慷慨にあらずや、月給の登らざる美人の顧みざる虚名の擧らざる万事の我が思ふやうに爲らざる亦た慷慨の種にあらずや、或は王侯の馬車に乗りて吾の徒歩する伯爵の金殿に踞坐して吾の下宿屋の隅に困する西洋人の豪富榮華にして吾國の貧乏ある等惣じて其懸隔の太甚しきに歎息する是れ慷慨にあらずや、亦た世悉とく眠り吾れ獨り醒め吾獨り胸うち世悉とく歡樂し吾先づ笛ふきて世人悉とく踊らざるとき亦是れ慷慨の基ひにあらずや、大凡そ如此き慷慨は或は笑ふべきものあり或は憫れむべきものあり或は悲しむべきものあり或は共に怒るべきものあり、吾人は其慷慨の種によりて之に同情を表すべし未だ初めより其の慷慨なるの故を以て直ちに之を賞むることを得せず、況んや安んぞ之に倣ふて常に徒らに慷慨することを爲さん。

慷慨とは心を激するの謂ひあり、國手酒の害を説くに酒は心臓を激する故に害ありと云ふ、然らば慷慨は衛生上に甚はだ害あるの情念とす、生命の尊ときことを知るもの何んすれぞ戯むれに之を試むることを爲べき、唯だ夫れ止を得ざるに由りて敢て激することあるのみ、則はち知る慷慨は稀にして常の情にあらず、喩へば猶ほ波浪の風に動くが如きか、太平洋上の水本來万里一碧にして沈滑玻璃を敷くに似たり、狂風之を激するに當り乍まち怒濤怪瀾を起す之れ變躰にして常正の事にあらざる也、人心常に亦如此なるべし、彼の無爲に苦しみて敢て騒亂を醸し太平に厭きて徒らに世を騒がすが如きは眞とに世を益するの慷慨に非ず、然らば則はち演説塲にステツキを揮ひ辨士を突き落し吾は自由壯士なりと云ひて人の言論の自由を妨ぐるは果して何種の慷慨なりや、又未だ經濟學を知らず外國貿易を究めず内外の關係を悟らず漫然壯語を吐きて西洋を夷狄とし吾國を神洲とするは果して何種の慷慨なりや、又たゞ慷慨することを知りて未だ落付くことを知らず破壞することを知りて建設することを知らず常に不平を云ひて何時も安んずる所ろなく爾も腹には便々として酒食を滿し絶へて一名方を案出せす一事業を成就せざるもの果して何種の慷慨なりや、如此き人は只だ風吹けば世は治まり波立てば海は靜まると思ふの愚人のみ、ブライト曰く余は極めて保守を好むもの也たゞ止を得ずして改革を守張すと、クロムエルの野を出で孔明の山を謝す豈に氣臨ならんや、皆な只だ止むを得ざるのみ。

○○○○○○○○○○○○○○

故に慷慨は當に眞智より發すべし、一時の氣情より發す可ら

ず、若し仁義大道に鑑がみ、天下の公德に訴へて、義默す可らず遂に起ちて事を爲すとせば、其慷慨や實に正しきに怒り公けに憤ふるの情なり、發する所ろ蓋し万邪を排し正々堂々の大事業を成すべし、苟くも然らず根する所ろ眞智眞能にあらずして只だ一時の細小私末なる瑣情に拘れるとせば、其慷慨や遂に人を殺し太平を害するに於て畢る、能事遂に他に見るところあるまじきなり。

顧みて二三十年の以前を見れば、吾國の天下は實に慷慨の天下にてありき、然れども滔々たる幾多の慷慨中果して何種の慷慨か眞誠の公益を爲したる、吾人今日に於て靜かに其慷慨を考ふるに、多くは是一時激昂の炎火にして到底眞味を表出するの熱氣あることとなかりき、寶刀に洋夷の血を塗らんと云ひ、開國の卓見家を姦として暗刺せんとし、詩歌悲憤にして鬼泣龍躍るの勢ありと云ども遂に蠻民の僻見を免るとなし、而して濟々たる幾多の血士は之が爲に切腹し割腹し五臟六腑を攫み出し放り投げ、七生尙ほ夷狄の肉を食はんと罵り、目を瞬らして絕憤恨死したりと云へ共、爾后二十餘年日本人は西洋人を妻にして和樂せるホームを作るものあるに至り、而して神洲に何等の不幸あるとなし、此に至りて秦檜果して怯なりし乎、孟浪果して勇なりし乎、斯申果して國を賣る乎、士亮果して國を興せる乎、流言の日誰か周公王莽を辨ぜん。

然ども此等慷慨の士は大率ね第二流の壯士にてありしなり、彼の象山と云ひ、小楠と云ひ、齊昭と云ひ、東湖と云ひ、松陰と云ふが如き、凡そ當世第一流の人傑に至りては、夙に鎖港の行れ難く開國の遂に爲さゞる可らざるを知れり、知つて而して徃々僞矯敢て慷慨の言を爲せるものは、斯の如くして壯士を激し士氣を奮起して、敢て國力を膨脹せしめんとを欲せしが故也。

壯士之を知らず果して激昂したり、此時に當つて彼の之を激するものゝ胸中を窺へば、寧ろ洒々落々として冷算寒計し巧みにゲレーソ、グラムの調合を爲しつゝ而も口に壯語大言を吐けり、嗚呼彼の壯士の末路こそ實に憫れむべけれ、壯士はたゞ彼の梟雄の爲に、木偶となれり、木偶慷慨し戰鬪し切腹するとき世は案の如く開港となれり。

然りと云へども壯士の啻に憫れむべきのみにあらず彼の梟雄の末路亦た大に憫れむべきものあり、彼等はアントニーの如く演說し、攪動して、

Now let it work. Mischief,
thou art on foot, Take thou what course thou wilt!

と云ひけり、而れども此の一類の騒動は遂に鎭めたしと思ふときに鎭まらず、鞭馬奔逸して騎手の御するまゝとあらず、乘手は遂に奔馬に乘せられて思はぬ遠方迄でに到着したり。

齊昭、阿部正弘に與ふるの秘翰に云く、

…太平打續き候へば當世の態にて戰は難く和は易く候へば戰に御決し相成り天下一統戰を覺悟致候上にて和に相成候へば夫程の事はなく和は主に致し万々一戰に相成候節は當時の有樣にては如何共遊被樣無之候へば去八日御話申候通り海防掛りへ極密に相成し公邊も此度は實に御打拂ひの思召にて號令有之度膝の下に和の事有之候ては亦自然と他へ洩れ聞え候故拙策御用に相成候事にも候はゞ和の一事は封じ置き海防掛のみの預りに致し度事に候右故本文にも和の字は一切不認候云々。

又齊昭嘗て私かに松平慶永に告げて云く、

天下の氣運大に變じて亦た昔日の鎖國は永續すべきに非ず僕は久しく攘夷の説を天下に公唱す今に至り忽然開港説を言ふべきに非ず卿は年尙ほ少壯なれば他年開交の時に盡力あらんとを望む是義を竊に卿に告ぐるは僕の寸志なり。

嗚呼是れ何等の窮語ぞ、然れども窮語は只だ窮語に於て止まるとなし、爾來水府の士氣分裂し、正姦二黨の爭ひ斷ゆるとなく、一盛一衰互に敵者を殺して藩裏の英才殆んど死す、何等の悲しきとぞ。某氏云く、英雄の末路は壯士に制せらるゝものなりと、嗚呼眞英雄の末路何んすれぞ必らず斯の如けん、彼の徒らに壯士を激せしむるの英雄は末路大率斯如くにして止ざるなし、蓋し良知に發せざるの慷慨は血を見ざれば休せず。

小楠先生云く、

凡そ我國の外夷に處するの國是たるや、有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二つ也、有道無道を分たず一切皆拒絶するは天地公共の實理に暗うして遂に信義を万國に失ふもの也。

象山先生云く、

五洲彼是有二吾師一、擇レ善從レ之何復疑、偏見未レ除。窮措大、自求二其穴一比二螻蟻一。

嗚呼時勢を見る當に一等高着なるを要す、家の爲には身を棄べし、國の爲には家を棄べし、然れども天下の大勢に留念せずして局促一國に縮心するもの安んぞ眞愛國者あらんや、慷慨は可なり、然れども只仁義大道の爲に慷慨すべし、人情一度激せば復明白の判斷を欠く、人慷慨するの前須らく天下の達

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

德に訴へ、高く天を見、遠く人性に鑑がみ、淸矣潔然として正大公義の途に斷理し、而して后ち敢て猛進決行すべし、彼の區々たる政黨を以て天地となし同胞相爭ひ遂に刄を以て殺すに至りては吾人其の狹量小膽に愁歎し遺恨止むとなし。而して黑衣屛后に立ち糸を操どりて巧みに慷慨を弄ぞぶものに至りては、惡きと何ものか及ばん。嗚呼慷慨するものよ徒らに慷慨すると勿れ、不幸にして他の木偶となると勿れ、淸冷自省し、深く良心に聞き、止むなくして后ち躍立せよ、四海の人皆な同胞なり、天下もと一家のみ、此間に立ち何の日か好みて慷慨し、何の兄弟に向つてか不平を寄せん、慷慨實に止むを得ざるに出る耳。

〇幾多の非廢娼論　（一）

問　現に廢娼論に反對する議論は何程之れ有り候や。

答　正面より反對するものは殆んど之れ無く、先づ廢娼は頓かに行ふ可らず徐々として施すべしと申す方法論に於て種々の異議有之候と云へど、眞の存娼論と云ふは未だ多く聞かず候、たゞ聞得たるは長谷川泰氏の說のみに候、然し他の漸廢說も或る意味に於ては一種の存娼論なれば此等に對しても多少考ふる所を述べ置たしと存じ候。

問　長谷川泰氏の說とは何如なる議論にて候。

答　先づ論を二段に分ち。第一色慾は人の天性にて制すべきにあらず、色慾を滿すに正婚と賣淫との二つありて未だ正婚を爲すの暇なきものは賣淫に由りて之を滿足すべしとの論、其一段にて、第二賣淫は惡事にあらず之を惡事とせば婚姻も惡事なりと云ひ、且つ賣淫を公許するときは害少なし默許するときは害夥たゞしと云ふの論、其二段に候。

問　驚ろくべきの奇論と存じ候、之に付き御考の一二伺ひ置たく候。

答　私供右樣の議論を辯ずるには抑そも根底より申さずしては効ある可らず、抑も社會とは何如なるもの政府とは何如なるもの道德とは何如なるものか解釋せずては先方の御論旨り格外の申條にて殆んど語ばを交ゆるにも難義を覺へ候、然し斯しては際限もなきとゆへ、先づ大方有德の同志者をお相手にして、極めて簡略に愚考のまゝを申述べんに、

長谷川氏は、正婚を爲す迄て慾を制すと云ふとは、道德堅固釋迦の如きものにて出來べし通常人には望む能はずと仰せあると、何如にも殘念の事なり、今の日本壯年は斯迄に墜落いたし居る乎さてく歎くべきとに候、然し好し左樣にてあ

りとするも女子は獨り貞を守り得るに男子のみ到底愼しむと難しと云ふは何故に候、昔しの女は書生となるともあらざりしが、今日の如く府下に留學する女學生多きの時節、二十二三迄て修業する女生徒の爲には矢張り男書生同樣の塲所を設け遣わし然るべき乎、此邊篤とお考になり、特に長谷川氏御自身の愛娘を學問さすと想像被成、其人男子同樣に放蕩を爲すとき此れ至當の事なり天性の情なりとして御許容あるべきか、色慾を天賦としての御立論は玆に至つて効なきことと存ず。次に賣淫は惡事に非ず、然し乍ら箱入娘を傷けお三を何如かするとは惡事なりとの說は奇を極めたる論法にて、殆んど辨ずる迄もなく、特に賣淫と正婚とは唯だ子孫を生ずると生ぜざると時の前と後との差あるのみと云ふに至りては、道德が社會に及ぼす影響何如に、男女の關係が國家に及ぼす利害何如に等の事を毫末もお考なき意見にして、迚もお話しすると出來不申候、極めて分り易きとは御令孃が賣淫に近づき玉ふ折、之れ婚姻に同じと觀念なさるべきか否やを問ふ迄に候。最后に公許は弊三分默許は害七分との割合は何に由りて割出され候乎、公娼密娼の比較に付きては前號に精しく相述べたれば今復たびは申さず、然し長谷川氏はベルリンに公娼四万人ありて同時に密娼四万人ありと論ぜらる、然らば公娼を置くとも密娼は絶やし難きものと御承知あるにあらずや、而して黴毒は職業的賣淫之が媒介を爲すとの事も亦た御承知とあれば、到底公娼を置くとも黴毒は絶やしがたきことを御承知あるに候はずや、シテ公娼を置くとは姦淫の空氣製造の譯にて同時に密賣淫私通等を增すものに有之ゆへ、よし公娼は取締りて其黴毒の二三を減ずるとも、其種を廣く販布せしむるの元塲となりて結局全面に黴毒を流すと廣大なるものゆへ、公娼を置けばとて決して黴毒を減ずるとは出來申さず候、古來公娼を置き乍ら能く密娼を取締り、公娼 密娼 併び 行れ乍ら黴毒を減じたる例し、何國にも無之候、たゞ此際政府たるものは誘惑的の事業を公許す可らず、道德家は罪惡を公行せしむ可らず、衛生家は一時の毒惡に堪へて永久に之を減ずるの策を講じ個人衛生に損をして國家衛生に得を爲し、后ち終に個人の衛生をも高むるの處置をなすべしとの主意にて、即ち先づ公娼を廢し切めて密賣と爲すとに候、然し密賣に爲せばとて決して之を默許し放任すべからず十分に取締りて嚴密の裁制を與へ、追々に其密賣をも減ずるやう盡力すべしとの事は既に每々申述たることに候。長谷川氏は日本人を剛毅勤儉

あらしめんとの事に熱心せらる、甚はだ然るべきことにて私供も同説なれど、抑も人心を剛毅にして風儀を勤倹にするは先づ色を慎み放蕩を制するより初まることにて、古來男女間の風儀亂れ而して國民の剛毅勤倹となりし實例は一つも無之候、ローマ、唐代、藤原氏の末など御參考になりて可然と存ず。必竟長谷川氏愛國の眞心は勃々として其演説の端に現われたれど、惜しひ哉終始人の肉の上にのみ頓着せられ絶へて高尚靈精の上に留念せらるゝことなく、結局たゞ醫者として國家人類の事を論辨せられ他に顧み玉はぬより、立論甚はだ卑くゝ相成候、人には精神あり靈魂あり一國には醫者の領分の外に屬する風紀道德など申す大切の項目夥多有之候ゆへ、たゞ人の肉骨血などの上のみより論決いたすまじき者に候。況んや正大なる醫者は精神を重んじ、精神を健全にするは主として道德を先にいたし候をや、到底長谷川氏と私供とは國家を見るの見方に於て大相違有之ことに候。

奴隸の市に行くものあり、奴隸を買はんとして之に問ふて曰く、汝を買受たるのち果して信實なるべき乎、奴隸答へて曰く、然り、君が買ふと否とに關せず余は信實也と。

辯士あり堂々演說す、頻りに悲憤慷慨し絶叫して曰く、吾等は自由の民、自由の地に立ちて濶歩するに非ずやと、聽衆中靴師あり應じて曰く、否な汝ぢの穿てる靴は未だ代價を拂はずと。

論説

○詩歌を學ぶの功用

雲峯子

米人某嘗て美の感念を論ずるに當り嘆じて云へる事あり曰く米國は元來商業國なるを以て人民一般此に心を奪はれ常に東走西奔俗事に鞅掌し世務に汲々たり故に美の感情思想を培養するの暇なし是豈米國の爲めに喜ぶべき事ならんやと、余之を讀で熟々以爲らく是只に米人のみ然るに非ず我邦人の如きも維新以來漸く此惡弊に陷の傾向あるが如し世人口を開ば即ち曰く產業興起せざるべからず曰く商業擴張せざるべからず曰く改良曰く何と甲呼び乙和して社會人民次第に世事俗務に心を奪はれ美てふ感念思想の如きはまさに失せ去らんとす見よ向嶋の花下に集合する人々は果して花の美を賞せんとする者あるか瀧野川に紅葉を探ぐるの人眞に紅葉の美を知る人なるか思ふに彼等は花見を名とし、紅葉に托して他に樂む所のものあるあらん其他或は月を見ると云ひ山水を樂むといふ者多くは其見る所樂む所月に非ず山水に非ざるべし何となれば若彼等にして眞に其美を愛する者あらんには必ず其感情思想は詩歌若くは繪畵となりて世に現はる可ければなり然り明治の今代に至て詩歌の秀作逸品と云べき者甚だ少きは人民一般

美の感情思想乏しきが故なるべし是豈賀ずべき事ならんや。詩人の大家と稱すべきものは山陽の時代に數人ありしを終りとなし和歌は景樹蘆庵の後亦之に比すべきものあるなし偶々詩人と呼ばれ歌客と稱せらるゝ人あるも多くは前代の人々と軒輊すべくもあらずヨシ軒輊し得る人ありとするも甚だ少數のみ然れど余は大家の輩出する少なきを以て直ちに詩歌は衰へたりと云はず只大家の出でざると共に一般國民が詩歌に心を用ゆる事少なきを見て大に國家の爲めに嘆ぜずんばあらず人或は云はん古中兩代に於ては人民の膏血に依て生活せる月卿雲客甚だ多かりき而して是等の人々多くは爲す事なく優々閑々日月を消費せしを以て時に或は無事に苦み花を眺めては心を爽にあし月に嘯ては鬱を散じたり是れ昔は文人墨客多き所以ありと、是或は一理あるの言ならん然れど今より數十百年若くは千有餘年の昔に在て十九世紀—文明を以て誇る十九世紀の人民が企て及ばざる秀品逸作をなせしは單に彼等が優閑の地位に在りしが爲めのみと云ふ可けんや必らず他に原因なかる可からず原因とは何ぞや曰く美の感情思想是なり貫之が所謂「やまと歌はもと人の心を種として萬の言の葉とあれりける」とは萬古不易の格言にして亦以て古代に秀詠逸吟の出でしは偶然に非るを知るべし若夫れ知識の高低深淺を比せば明治近代の人民は彼に勝る事恰も天の地に於けるが如けん然るに彼我の詩歌を比すれば亦實に雲泥の差違あるを見る、是豈我國の爲めに賀すべきならんや。

抑美の感情思想なるものは天の賦與する所にして各人其能力に從て之を培養し發達せしむるの義務ありと云ふ可し何となれば天は一物として無用無益なるものを人類に賦與せざればなり西人云へるあり曰く、

吾人々類は美を感得し亦美を見て感ずるの性を自然に賦與せられたり此故に眼を放つて美麗の物を見るや直ちに美てふ感情起るなり云々。

眞に然らば此天性を發達せしむるの任は各人免るゝ能はずと云ふべし若之を培養する事を怠り俗事に沈溺して美の何たるを知ざるが如きに至らば是既に天然の美質を損じたるものにして決して完全の人間と云ふ可らず然らば吾人は此美質を發達せしむるに力を致すは只に吾人視官の快樂を全ふするに止らずして天の與ふ所に對して盡すものと云ふべきなり。

美の雅味力なるものは智力即ち感應力及び判斷力の偶にして容易に培養するを得べく亦培養せざる可らざるものた

り人心の官能中最も教養練習を要するものは實に判斷力に如くものなし然し其判斷力中最も教養練習し得べきは雅味力に如くものなし美の雅味力を培養し習練せざる所の人が美を翫味する能はざる事恰も物の大小遠近を判知し馴れざる處の人が不完全なる判斷を爲すが如し故に美の雅味力は務めて培養せざる可からず即ち心に美の原則本質等を知悉し或は天然の美を見、或は人工の美術品を見て以て之を判斷し比較し類別するの力を養成せざる可からず其他文學上の著作たると美術品たるとを問ず苟くも世人の稱贊を博し古來の名作と呼るゝが如きものは勤て之に接し注意誠心以て之を觀察すべし是實に美の雅美力を養成するの方法なり。是即ち雅味力養成に就て某西人の云へる所なり余も亦之を深く信じ敢て世人が此に心を用ひられん事を希望して止まざるなり故に今之を養成するの方法につひて聊か余の愚見を陳ぶる所あらんとす。

世人較もすれば輙ち曰く詩歌を學ぶは何の爲ぞと、詩歌は心に鬱積する所の感情を發表するの器なり教師に就き題に依り強て作爲するとも何の益かあらんやと是余が屢々耳にする所の言よして亦余が屢々考慮せし處の問題あり余素より此問題よ對して充分の辨明を爲す能はざれども聊か考へし所を陳述するも強ち無益の業にあらざる可しと信ず。

夫れ詩歌の妙は實景を寫すにあり神を穿つにあり有のまゝを審くにあり縱令金言玉語を並列するとも若其詩歌にして實際に迫らざる時は之を秀逸と云ふ可からず古來名作と稱贊せらるゝものゝ一として其字句の妙絶あるが故にあらず眞景眞情を穿寫せしに依らずんばあらず偶字句の妙なるが如く見ゆるものと云へども深く之を極むれば必らず其描寫する所の實景を穿てるに基かずんばあらず故に人より題を與らるゝにせよ苟くも詩歌を作爲せんと欲せば先づ實情實景を想像の中に畫かざる可らず斯の如くにして若實景を穿ち得バ是詩人歌客の快樂之よ如くものなからん何となれバ是即ち詩歌の神髓を得たるものなれバなり斯の如くして一度實景を描寫して而して後其實景を實際目擊する時は眞に云ふ可からざる感情と快樂を覺ゆるものなり越後の人三輪長行氏の詠あり曰く、

敷島の道より見れば古里の
なれし野山もめづらしき哉

と、實に然かり嘗つて見馴れし山野と雖ども詩人的の眼孔を以て觀察するときは一種の感情鬱勃たるを見る况んや他境の

山川、異境の風景に於てをや見るものとして多少の感を起さゞらんや然れバ詩歌を學ぶハ人をして美の雅味力を養生せしむるの効力あるハ蓋し瞭然たるべし只に是のみならず一度詩歌に心を止むる時ハ一種の注意力を養成し得るが故に事物風景を觀察するに常り大に緻密なるに至る、緻密に觀察せば其事物風景亦以て詩歌の材料となるに足るべし斯の如くにして詩歌ハ美の雅味力を養成し且つ注意力を與へ、觀察する處の事物ハ詩歌の思想を補裨し互に因となり果となり以て大に美の感念を發達せしむ是詩歌を學ぶの必要ある所以の一なり故に若先に云へる如く各人美の感念を發達せしむるの必要ありとせば詩歌を學ぶハ大に稗益する處ありと云ふ可し誰か云ふ詩歌を學ぶは無益なりと。

詩歌を學ぶの功用業に已に斯の如し倘之に伴ふて得る所の稗益ハ甚だ多かるべし例之バ思想を高潔清白ならしめ亦想像力を養成するが如し其他倘種々の功益あるべけれども余ハ今此に列擧するに遑あらず余詩歌を學ぶの功益必要につき聊か偶感を記するのみ。

余ハ信ず若人にして美の感念なきに至らバ人世快樂の大部分ハ已に失ふたるものなる事を何となれバ人世の快樂ハ詩歌、風色、繪畫、彫刻等凡そ美を基礎となす所のものより得來るもの甚だ多ければ也佛國の小說家某甞て云へり(余の拙き筆を以て此妙絕の文字を譯さんハ甚だ恐れ多し故に英譯の文を左に揭げん)

Literature is the daughter of Heaven, who has descended upon earth to soften and to charm away all the evils of the human race.

是實に文學の本色なり本分なり此に至つて始めて文學の目的ハ達せりと云ふべし然らバ此目的を達せしむるの方如何即ち人々に美の感念を養成せしむるにあり之を養成するの方如何詩歌を學ぶハ即ち其一なり余が世人に向つて詩歌を學バれん事を望み美の雅味力を養成せられん事を希ふも豈亦故なしとせんや。

されど余ハ世人をして皆詩人たり歌客たらしめんと欲するものに非ず唯天賦の能力に從ひ各人美の感念を發育し其取る所の職業を問ハず其位地の如何に係ハらず萬物萬象に現ハるゝ美の幾分を感得し之に依て多少の快樂を得以て人界の苦悶煩憂を慰癒し遂にハ現世をして樂園となし極樂と化するに至らしめん事を。

批評

○ベルツ氏女子教育上の弊害（上）　撫象子

ベルツ氏嘗て大日本教育會に於て「女子教育上の弊害」を演述す、其比ろ筆記して同教育會報告に掲載ありしものを見、敢て一言の評を寄せたるが、ベルツ氏が時弊に憂ふるの信切あるや此頃更に之を印刷して別本に製し各女學校に配布せり、此に於て其論に關する是非の批評復たび起り書を寄せて吾社の意見を問ふもの亦少なしとせず、故に余れ少さか考ふる所ろを述べて此論の當否を判定すべし。

ベルツ氏滔々千万の言ば、括するに左の十一則に歸す、則はち掲げて讀むものに示し且つ各條の下に愚考を附す、

一　男女には各々適當する所ろの教育を授ざる可らず（之れ至當の見解にして何人も言ひ爭ふとなし、たゞ何如なるものが即はち適當なるもの乎と云ふと問題となる也）。

二　今日の歐風女子教育は男子の教育と大差なし故に日本に於ては特に之を變形して用ふべし（玆に歐風に記するは誤まりにて主も米風を言ふと思はる、男女全然教育を同ふすと云ふとは先天的に其の誤りなるとを覺るを得べし、然れども或る限り迄は必らず同一ならざる可らず、特更に女子の教育を卑くゝするとを主張するは尙は蠻風の遺れるもの也）。

三　今日の女子教育法は處女の春氣發動期に當りて大に衛生法上の弊害を生ず神經系統は一部は筋肉及び血液循環の爲に發育するものなり處女の腦髓に全く不用あるものを充滿すると惡し、（凡そ何如なる教育にても身躰を害する程の科程を負はするは當然の教育にあらず、但し相應の勉學は反つて腦髓に適好するものにて全く學びざるものよりも寧しろ其の養ひとなるものなり極めて躰育に掛念せるスペンセルも亦左様に論じたり、故に教育の過重して身躰を害するに至るは言ふ迄もなく惡しきとにて只だ其何程が能く適當あるかを研究の問題とする也、腦髓に全く不用なるものを教ゆるは固より不用なり然れども幾何代數化學等を以て女子の腦髓に不用なりとするは抑そも何に由りて斷知するを得る乎之れ更に氏の辨解を要するの條たり）。

四　日本の女子教育法は國勢及び時の狀態に依て編成せざる可らず然れども歐風の教育法を以て基礎とするとなくして日本教育基礎を立つるの參考に供ふべし（是れ言ふ迄も無きとなれども左ればとて日本在來の教育も亦其原理を誤まり居るに付き大に更正する所ろなかる可らず、必らずしも歐風に

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

據ると云ふに非ず眞正の敎育原理に據るべしとは云ふ也)。

五　日本の敎育は學說に流るゝ傾向あり性質の開化と云ふとに注意せず女子を敎育するには性質の養成を謀らざる可らず即ち學校に於て學理的の敎授を重んずるよりは實地的に女子を敎ゆる方却て利益多からん(是れ亦た女子に就てのみ云ふべきとにあらず凡そ眞誠の敎育あるものは皆な當に然るべき筈なり)。

六　高向ある道德的の敎育は强て耶蘇敎の力に依らざれば得られざるものに非ず(或は然らん然れども或る時は孔孟に據り或る時は佛敎に據り亦或る時は理學に據ると云ふ如く終始轉々して德育の基礎を動搖するときは到底決して眞の人才を得ると能はず、ペルツ氏の說固より重んずべし然れどもペスタロッチ、フレーベル等の如き大敎育家の說亦固より重んぜざる可らず而してわが數年間の實驗に據るに女子敎育は特に宗敎的道德に依賴するを可とし宗敎中尤も高尙有力なる宗敎に依賴するを可とするとを認識す、此事加藤弘之外山正一等の學士亦た同說あるが如し)。

人と禽獸とを分つ必要の相違は何んぞ、改悔の念と義務の感情とを併せ有する彼の良心の刺激あると即はち是れ也(ダーヰン)。

○小學毛筆畫

八冊、跡見玉枝女史著。

第一冊より第八冊に至り、小學の生徒に日本筆を以て畫を習らはせんとの趣向なり、從來日本畫の習ひ方には、古しの狩野風の如くゴバン目を縱橫に引くとより敎へるのもあり、又た通常の四君子より習はせるのもあります、然し此は何れも正當敎育の理を誤まつたもので、初學者に先つ無味なる元則樣のものを敎へやうとする誤りと又は初めから筆力斗りに氣を入れしめるの誤まりとの二つに歸します、凡そ畫を習ふには先づ形をまれ、次に風致風韻に及ぶべき者で、最初から韻致のみを主とするときは虎を學んで反つて猫に陷いるの憂ひがあり升す、又た無味なる元則を最初から敎へるのは例へば文法を初めに敎へて直ちに文章を作らせるの敎育方で、之は近比敎育家が承知せぬ所ろです。　此の二の敎へ方を離れ一種正當の新則に出でたは即はち此の書で至極結構の事と思ひます、然し子供は兎角道具類よりは草木、草木よりは生物といふやうに、先づ動くものや伸る者を好むの性あるものですから、成るべくは最初から馬や人の形を簡畧に書かせるやうにする方がよいと思ひます。兎に角此書は日本畫の敎へ方に一工風を運らしたものでで、凡そ此途に注意するものは輕々しく看過すまじきとです。

○當世批評家

金　勢　歎

讀賣新聞にレッシング氏の投書あり、當世の批評家を三幅對に見立てゝ忍月蛸天不知庵の三主人を撰ばれたるが、之は小說斗りを文學と心得て廣く見識されざるの處置なり、當世の批評家は他に尙ほ多く有之候、右三主人を劣れりと申すには毛頭無之、少くとも之に對するほどの批評家極めて多しと申すに候、中に就き尤も秀でたるを擧れば、

外山ヽ法師　　二葉亭四迷主人　　德富蘇峯氏　　依田學海居士

植村謙堂學人　　高田半峯居士　　福澤老生翁君　　福地櫻癡居士

田口鼎軒處士

批評家の學問は、博學にして薄く、注意八方に走りて其時其一方にのみ鋭く、實に當るとを用心して傍觀の口賢しく、前后矛盾したるとを言ふに頓着せず、多くは起と云ふ大著作なくして常も著作する心組に構へ、持論時々流轉して變通不自在ならず、要するに鐵の伸板となるよりも針となり、著物となるよりも日鏡となり、肉米となるよりも胡椒となり、生涯議論して建設家とならざるにあり、二葉亭及び鼎軒の如きは例外なれど、凡そ批評家と云ふものは時々如此きもの也。今の世に批評眼弱きとを知らんとせば、先づ世人の眞批評家を知らざるとを見れば足れり、然し之も見へまヽ。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜録

○閨の怨

蓮峯外史

明治維新の初にあたり世の中ハ麻の如くみだれ諸國諸州到る處として兵馬の聲ならざるハなく人々安堵き心もなかりし程に忠義に勇むますら男ハ野末の霜に身をまかせ戰塲の沙に骨を埋めしものも多かりけるそを淺香山の淺からぬ契をこめし我が夫と知らでや長き秋の夜あわれ夢路に戀すてふ閨守る人ぞかなしける中にも勇々敷婦人等ハ夫と共に一身を鴻毛の如くに輕して國難に殉ひ或ハ亂兵の間に幼兒を懷き峯の白雲入にし人の跡を慕ひつ其の貞節を全せりかゝる烈婦貞女の中にい萬死を脫れ一生を得てうれしや修羅の街の夢醒めて霞たつ都の春の初日影夫ハ明治の勳臣とて肖像を麒麟の閣に畫がき名を竹帛に垂れて共に花咲あしたを迎へけりされバその身も錦繡帳裏に起居し衆多の侍婢にかしつかれ富貴榮花を極めつゝ鹿鳴館の宴延涼殿の月の會絃歌漫舞の娛樂に千代を經ぬらん吳竹のうれしき節のはじめぞと思ふもなどか無理ならめされど歡樂極りて哀情の發るハ浮世のならひにて移りかはれる春秋ハ雲なす髮に霜花を置き芙蓉の面に波紋を添へて健康もいつとなくむかしに異ることゝハなりぬ生死の塲に奔走し劒の風に向ひ彈丸の雨をくゞり衣を裂きて良人の瘡痍を包み袂をかゝげて刀の血を拭ひたる勇婦も病痾の敵に襲れ辨佞の伏兵に圍れあわれ遁るべきやうもなく〳〵囚虜の身となりたるも無慙なりそれ心に刺ある人の手は柔らかく腹に毒ある者の口ハ常に甘し醫師ハさま〴〵に慰めて病を養はんにハ都の塵を避けて暫時閑雅なる仙鄉の花鳥を伴とし雪月を咏ずるにしかずとすゝめたり元より百年の壽命をねがふべきの身にしあらねバとて初めの程ハ辭みたれど命ありてこそ人世ハ樂しけれ病の爲めに心を煩し良人の憂慮となるもよきことにハ候ハじと理を盡して說きすゝむれバ今ハ辭がたくやありけんおぼつかなくも十世あまり棲息れし都を外にして遙に故鄉なる人めも草も枯ぬべき山村里に歸着たりこゝハ嵯峨野の奥にあらねども茅の檐は苔むしてむかしの伴侶を尋るに砂に印したる鳥の跡ととふものハさよ嵐松に音するばかりなりさらぬだに良人の安否も心にかゝり都の空のなつかしく思ふものから今一トたび吾妻へと雁の音れ燕の便りに傳へたれど其とてはか〴〵敷答もなく逢坂やその名ハよその契にて今ハ此方の關とハなりぬかくものうき歲月をおくりむかへうきふしゝげき吳竹のはしになりぬる身をうれい同じ野末の露と消

へ一ッ刀の銹とならんと人しれず契し中の言の葉をあらし吹けとは誰が所為ぞ薄情き人も世にあるものぞ心にとふて心に答へこしかた行先を思ひつゞくればあれたるまゝの庭の秋よりことさらに露けくてかこちがほなる蟲の音にも腸をたつかとばかり覺へたり。

柳の姿も緑の色おとろへてハ秋風の吹ぬものかハこれぞも野蠻陋俗の俚言にぞありける憫むべし情慾の奴隷たる人よ百年の苦樂を供にし生涯の浮沈を計る糟糠の妻を捨て河竹に一節たらぬ糸竹に人を慰め一夜の情を鬻て生活とする薄情き婦女子の色香に心をうつし深く染みて社交の席に手を携へ暗花繊月の筵に坐を共にし翠帳紅閨に同じ夢を結び比翼連理の契を約していと誇り顔なるぞあさましける顧みて其の良妻賢婦のあれる果を思へば誰か涙をそゝがざらんや黄粱は已に熟したるも盧生の夢は醒る期なく槿花の盛りを短かしと看むれど盛者必衰の理を悟る者なし維新の英傑にして能その終を全せしものは幾人かある其の畢生の事業も他人の為めに作りたる嫁時裳に異ならず豈ひとり當時の貞女烈婦のみならんや傷心しきかな男尊女卑の國に生存ては如何なる義烈貞操の婦人も七去三従の縲に繋がれ無情男子の翫弄を逃るゝ由なし琴瑟を鼓するが如く和樂してかつ樂しとは口頭の教にて清潔の愛を何れの處にか求めん松の色千とせまでと契しかひもなく色衰ふれば愛情減じ妻をかへ妾を蓄て誰あやしとするものなし却てヨングの多妻を羨みパウロの室なきを嘲り外部に向て我は東洋君子國の人民なりと誇稱せりそれ佛教は智慧を愛し儒道は誠を重んず然して未だ如此社會の通患を匡正せざるは何ぞやかれ果して之を善とするか或は力の及ざるか今や天意にかなひ人心に合ふ一夫一婦の教を信ずる人は力を盡してこの陋俗を改良せずんばある可からざる也。

○和歌よみ方（上）

鈴木弘恭

或る令嬢の御許より詠歌を學ばんには如何なる手續きにせば便利なるや又書物は何等の書を見ればよろしきやと問はるゝに答ふ。

前略御申越の件々承知いたし候まづ詠歌の事より左に申述ぶべく候。

そもそも歌を詠むことは決して格別むづかしき事はこれなく候其わけは此の歌と申すは土佐日記にも申されたるが如く我が國にては神代より神もよみ玉ひ今は上等中等下等社會の人までも隨分よく詠み候間貴賤などには少し御注意あらば直に御自得なさるべくと存候。　さて尋常の歌は三十一文字にま

ともまりて夫れで意味がよく通じさへすればよろしき事に御坐候へども名歌と申はなか〳〵難きことにて世の歌人といはるゝ人にても詠む度ごとに名歌は出來申さず候間これを見れば必定かたき事に相違これ無く候。

三十一文字とは最初に五字一句次に七字一句次に五字一句次に七字一句次に七字一句是れにて三十一字なり然して第一第二第三なる五七五の三句十七文字を上句と申第四第五なる七七の二句十四文字は下句と申候今百人首一の歌にて其例を申ば持統天皇の御歌にても柿本人麻呂の歌にても能く一句づゝ味はひて見玉はゞ大かた詞のつゞけざまは御わかりにあるべくと存候

はるすぎて(五字)なつきにけらし(七字)しろたへの(五字)ころもほすてふ(七字)あまのかぐやま(七字)

あしびきの(五字)やまどりのをの(七字)しだりをの(五字)ながながしよを(七字)ひとりかもねむ(七字)

さて又天智天皇の御歌山邊赤人の歌小野小町の歌などは三十二文字づゝあるのは是れは字餘りの句が一ヶ所づゝあるゆゑなり然して此の字餘りの句となるものは必ず五十音のうちのあいうえおの五字のうちに限ることに御坐候、

天智天皇の御歌第三の句　とまをあらみ(六字)

　是れはあの字餘れるあり

山邊赤人の歌第二の句　うちいでゝみれば(八字)

　是れはいの字餘れるなり

小野小町の歌第一の句　はなのいろは(六字)

　是れもいの字餘れるなり

これらの例なればあいうえおのうちの字があれば何番目の句にありても指支なし字餘りの句が一句あれば三十二字になり二句三句あれば三十三字にも三十四字にもなることとあり然れども毎句に字餘りなるは少し初學のうちは成べくは字餘りの句を用ゐずして易らかによむが宜しき事とぞんじ候。

ビツコの妻にメクラの夫あり、要君得意になり曰く天に在ては比翼の鳥とならん、地にあつては連理の枝とならん。

○東京府下名醫の栞

波迺舍　朧

本誌第百九十八號に「眞理」と云ふ雜誌より轉載したる名醫十人と云ふものを掲げられたり然るに此は實に御慰に過ぎずして此を以て信に東京府下否日本の名醫とは吾人醫學社會の者は信じ不申候素人の其醫を鑑定するは御世辭の巧拙と玄關の廣狹を以てすれ共吾人は只だ學術共に秀逸なるや否やを以て

鑑定の標準とすされば此にいさゝか吾人の信ずる名醫諸氏の姓名を掲るも亦た醫の一端にして患者諸氏の便益ならむかと考ふまゝに記す。名醫豈に名を好んや幸ひに諸氏余を叱咤して修業不足の學生と云はるゝ勿れ全く患者の爲を思ふの故にして少しも惡氣にて記載致したるには無御坐候以上。

内科
ドクトルベルツ氏　佐々木東洋氏　醫學博士佐々木政吉氏　樫村清德氏
醫學士森永友健氏　實吉安純氏　醫學士青山胤通氏

外科
ドクトルスクリバ氏　醫學博士佐藤進氏　醫學博士橋本綱常氏　醫學博士
高木兼寛氏　醫學士佐藤三吉氏

産科婦人科
醫學士濱田玄達氏

眼科
醫學士甲野棐氏　醫學士河本重次郎氏　醫學士須田哲造氏　井上達也氏

小兒科
醫學士弘田長氏

皮膚病科は
醫學士村田謙太郎氏　醫學士宇野朗氏
され共兩氏共に目下獨逸國にて研究中

精神病科
醫學士榊俶氏

其他衛生家裁判醫學家等の如きは先つ病家の入用なき故畧す（醫科は醫學者の仲間に非す）

病院は
醫科大學　第一及第二醫院　東京慈惠醫院　赤十字社病院
等か最も宜しからむ。

○節分のこと

高橋おろか記

去る三日は節分とて其夜ある家に於ては俄然に大霰のふるごとき音をさせたりきこれ所謂「鬼は外福は内」と呼びて陰惡の氣を驅り、青陽をむかふる式として炒豆を撒ちらしたる事なり、これを儺（おにやらひ）いとふ、いと古き風習にて明治革新以前には官民ともに必すこれを行へり、今も此式を守る家あれども多くは闕す、さて此事の物に見えたるは紀元千五百九十四年を以て始めとなす、土佐日記（紀貫之延長八年土佐守の任に赴き承平四年十二月歸京の時の紀行なり）に、元日云々九重のかどのしりくめ繩なよしのかしら、ひゝら木ら、いうにとぞいひあへる）とあり、また江家次第（大江匡房著）裏書に、行儺前一晦日二日といひ、公事根源（應永年間一條兼良公著）に大舎人寮鬼を勤め陰陽師祭文をもて南殿の邊に著てこれを讀む、上卿以下これを追ふ、殿上人御殿の方に立桃の弓、蘆の矢にてこれを射るといふ、また日次紀事（黒川道祐著）に、年内に節分あり、則ち其夜禁裏熬豆を殿中に撒れて疫鬼を逐ふ、春に在も亦然り、今夜大豆を撒を拍と謂ふ、云々同夜家々門戸䆗樒に鰯魚の首並に狗骨の條を挿す、傳言此二物は疫鬼の畏る所なりと、又大豆を家内に熬是を豆打といふ或ひは豆を拍といふ、凡そ一家之内事を執者之れを勤む、是を歳男と稱す、高聲に鬼は外、福は内と呼びて疫を禳ひ福を索む、其後合家各々大豆を食し熬に則ち己が歳の數を用ゆ、此外人々大豆を以て紀年の數と孔方兄數枚とを配し白紙を以て之れを包み自ら遍體を摩り則ち是を街頭疫拂に授く、疫拂之れを受て高聲に疫を逐ふ詞を唱へて之れを祝す云々と見え、臥雲日件錄に、文安四年十二月廿二日明日立春故に昏景に及び室毎に熬豆を散ず、因て鬼外福内の四字を唱ふ、蓋し此方に驅儺の様也、また元長記に、文龜四年正月十一日云々節分なり打二大豆一祝着候儀如二例年一など諸書に見るを以て考ふれば、上下一般の行事となりしも最ふるきことゝいふべし、さて此事を土佐日記には元日の處に記るされど、これは除夜の事をもおしくるめて京地の樣子を想ひ出して書るなるべし、公事根源には晦日となし、また前に引ける書とも並に四季物語、世諺問答、埃嚢抄等には節分とあり、近俗の行ふ所も亦節分なり、然れども此追儺の行事は元來支那より移り來れる事にて、周禮夏官司馬に、方相氏云々また禮月令十二月の紀に、命二有司一大儺と見へ、論語郷黨篇に郷人儺朝服而立二於阼階一とありて孔子も此事を重んぜし趣きなり、五雜俎に儺して以て疫を驅也、古人最も之れを重んず、漢より唐に至り、宮禁中皆之れを行ふ云々、王建詩云、金吾除夜進二儺名一畫袴朱衣四隊行、是也とあるを見れば、除夜に行ふことなるべし、節分の夜に行ふは古き事には非るべし、また土佐日記に鯔をさすとあれど、これはその頃なよしを用ひしにや、埃嚢抄、四季物語などには鰯とあり、近俗のなす所も皆赤鰯とて乾たるいはしなり、因にいふ、東京淺草觀音にては除夜追儺あり、初更のころ鬼形の者一人堂外に出で又一人方相氏の假面をかぶりたる者これを追て堂を巡る、後除疫の札三千枚を撒じて諸人に與ふ、參詣の人各々爭ひ拾ふて歸り自家の門に貼るよし或書に記せり、今も此事ありや知られざれども、近くまでは行ひ來りしと見えたり」開明の今日に於ては小兒の戯れに比しく思はるれども、千年以來打續きて今なほ人之れを知れり、習俗の破りがたきことと推て知るべし。

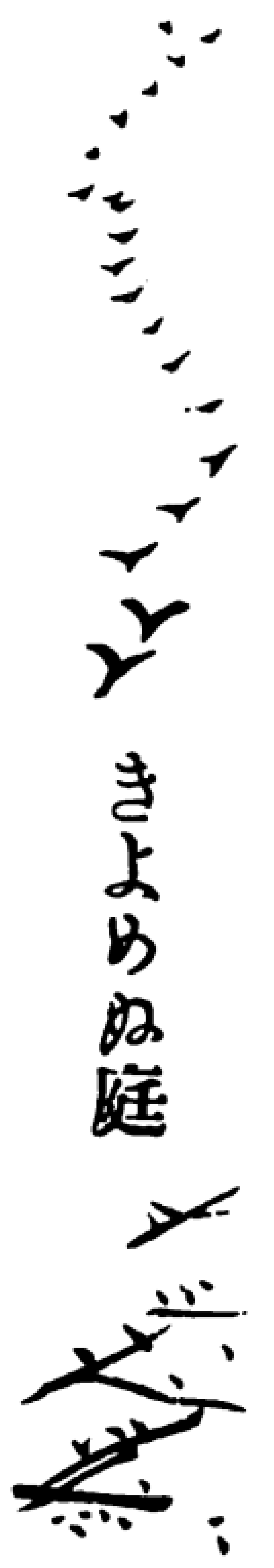
○野菜會員の辨解

思明庵

蔬菜を食するに左に記する數條の利益あり、有名なる學術家ガセンディー、リニヤス、ドーベントン、キユービヤ、ローレンスの諸氏は蔬菜を食用とする事に向て十分なる研究を經て其の利益を確證せり、今說かんとする數條中蔬菜と稱するものは惣ての植物又はその菓實等にして、又た鷄卵、牛酪等をも含み居れり、如何となれば牛酪、鷄卵等は蔬菜によりて家畜より生產し得ればなり。」何故に蔬菜を食す可きか、則ち第一、人間の身躰に於ける內外の構造は蔬菜を食するに適當せる事。第二、肉類より得難き養分は野菜中より容易に得らるべき事。第三、動物の肉は如何するも腐汚の分子を脫する能はざる事。第四、市街に於ての屠獸は病みたるもの多き事。第五、蔬菜を食する人は肉食する人に比して病少なき事。第六、醫師の經驗によりて見れば酒を嗜むの人其量多きに從て又肉を好む多き事。第七、世界創世の時眞神の蔬菜を食ふ可き命ありしがためなる事。第八、肉食を嗜む人恐らくは獸慾の昌盛に趣くがため自然德義上の進步に關係する事勘なからず從て智育の上にも蔬菜を食する人の進步大なるを見る事。第九、容貌の上に大なる美を顯はす事。第十、屠獸の際獸類の悲叫、流血、殘刻なる樣、等は人間の高操に反對する事故蔬菜を食とするものに及ばず。第十一、屠獸者をして其職を甘んじて務めさすることは學術上より或は經驗上より無用と認めかつ不利益なる事を證するに足るの職に在らしむるものなる事。第十二、屠獸其肉食產出の土地を三分し其一を豆其の他惣て莢豆種屬を產出すべき土地に使用又其一を芋類の產出地とし又其の一を菓實、森林、牧場等に使用せんには他國の食物を仰がざるも內地に於て十分に供給し得べき事。第十三、牧場、田野等を開拓したらんには屠獸の職に勝りて多人に職業を與へ得るのみならずまた其人々をして健全ならしむるを得べき事。第十四、斯くあらんには無用の地なく獸獵の山野全く青田碧野と變じ不毛地肥饒の豊土となるべし。第十五、蔬食中豆及び小麥の如きは獸肉に比して十倍程も低價なるのみならず其滋養また均一なり。第十六、工人其他惣ての貧人は低價の食物を購ひ得て經濟上の煩慮を免れ得べし。第十七、小兒は惣て粉製の食物又は菓實を好む又た幼時は肉製の食物よりは小兒のために益多し。第十八、肉食をなす獸類に限り猛惡にして勞働の益をなさず牛馬の如きものはこれに反して人を益する事多し。第十九、野菜を食する人は菜肉の

兩种を食する人に比して筋肉逞ましく躰量重く力量強かるべし。第二十、歴史中有名なるかのスパルタ人は其強力、勇敢なりしは蔬菜を食とせるによる、グリース、ローマの兵又た然り。第二十一、新思想を發表し、智性の境界を濶歩せし人は必ず野菜を食とせり、エピキユラス、プレトー、ペタゴラス、プルータ－ク、ミルトン、ニユートン、ポープ、ウエースレー其の他の英士秀才も又然りとす。第二十二、第二十三、肉の混合せざる食物を取る人に限り壽命長く幸福多かるべし。第二十四、蔬食によりて富饒の邦土に流れ來る奢移の弊風を止め得べし。

二輪車へ乘た小供が此の車はぢき倒れるから乘り惡いと云へば傍より亭主がその答だ自轉車だもの



きよめぬ庭

其二

鋭敏なる天文學者

洒落齋主人

今は昔、肥後國熊本城の邊りに、何某と云ひけるは、其頃世にも高名き天文學者になんありける、されば其門に來りて學ぶ者數多ありて、家も豐富に暮しける。其頃は今の如く、レープツルドの子午儀、スロートン及びスミスの赤道儀など稱ふる天文器械の設あらざれば、古より傳はりし渾天儀など備へおきて、宵に至れば常外方に出でゝ、天を瞻め、切りに銀河の流に注目け、又た星宿の動靜を窺ひては、門人等に說き聽する事共、一として中らざる事なく、天下の景情、太平戰亂の預言、大雨大旱の豫知、皆な神の祕密をあばきたる如き辭のみありしかば、時の人々は實に希有天文學者よとなん云ひ囃しける、門人の者共も、己が師の神通を得たる如き明識には、常も肝を寒し居けるが、或時の團居にて一人の云ひ出しけるは

甲　ナント諸君、僕等の先生、は實に神通でも得たのか、何んな微細な事でも、知らぬことはないが、然し弘法にも筆の過り、何とか一つ試して見樣ぢやアないか。

乙　此は贊成だ、然ば起草委員は僕に任せ給へ、其に就て實に妙不思議の方法がある。

一同　そんなら君等に任すから何とか先生を試して見て呉れ

と、こゝに物好の輩は、其機の來るを待ち居たる。頃しも「さ月來てはあたち花のちるあへに山ほとゝぎすなかぬ日ぞあし」と兼好がよみける、さ月もすぎて、修禊する六月、星夕祭る七月になんなりける。此頃は彼の天文學者、宵よりは庭に降りたちて、椽端に据へたる床几と云ふ物に、腰うちか

けて、天を瞻むるを常とせり。或夕のことありし、師の出まさぬ先きにと、一人の門人、何所よりか持ち來りけむ、瓦七八枚双手がけにかたげつゝ、出來りて、彼の床几の四の足の下に、三枚づゝ据へおき、自ら此に腰うちかけて試みつ、いそぎ走り行きて、此旨朋の門人等に告げ、己れ得たり貌に語りしかば、皆ひそ〳〵と笑ひ居たり。此は師の、彼の床几に腰かくるも、其下に瓦のおかれたるを、知るや知らずやを試さんとの事なるべし。

其夕は、常よりはかさ増りて見る門人等の、早より此庭に集て、己が師の智識試しせんとは、實に嗚呼の痴者等なりけり。さるほどに咳一つ二つ聞へさせつ、手に鵝羽もて作りたる團扇をもちつゝ、徐々と椽先に降り立ち、彼の床几にあん腰かけたり、其折の門人等の顔、生憎に月遲の夕にて、のぞき見るとのかなわざりしは、切てもの幸なりしかも。

天文學者はこともなげに天うち瞻めて餘念もなかりしが、兩度三度頭左右にひねりつゝ、云ひ出けるは

天ハア不思議のこともあるものダ、今夜は平常より天が一寸斗近くなつタ。

此をこそ鋭敏なる天文學者となん云ひけれ。

編者云前號に膽太のしれものとして記載したるは此きよめぬ庭第一の分なり

政府の根基は先づ汝ぢが胸中に創まるべし、汝が情慾を支配するを以て政府の支配の最始と爲すべし（プルターク）。

〇小兒の食物

愛兒生

私は前號に小兒の衣服の事と寢る事とに就て少し申しましたが今度は其食物の事に就て少し云ひましやう諸君も御存の如く生れてから二年たゝない内に死ぬる小兒が多く世間にはあります、シテ其内の過半は大抵食物から起るのです赤兒の間はまだ胃の腑が弱いですから食物を過ごしたらいけません赤兒は食物が欲しくなると泣きますからよく氣を付て居て其時に食べさせるのがイーです然し小兒が食物を求めて泣くのと痛みや苦みがあつて泣くのとは大に違ひがありますから是を聞き違はない樣にしなければなりません若痛があつて泣く時に其泣きを止め樣と思つて食物を與へる事がありますが是は益々其苦痛を增すばかりです通例食物は二時間から四時間位間を置て食べさせるのがイーです生れたての赤兒には極く淡い乳を呑せなければいけないです夫故母親の乳が始の間は淡い樣に(自然に)なつて居ますから母親の乳のある時は之を呑せればイーです若し不幸にして母の乳がなければ牛の乳にしてでも何にしても初は淡くして呑せなければいけません。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○雨水と雪水　白天軒

雨水は最も純粹なるものとは誰れしも思ひ居れど決して然らず其點滴大氣中に於て酸素、窒素、炭酸、アンモニヤ、等を吸入す、而して大氣中の汚物を悉く掃除し去るが故に海岸に於ては鹽分を含み、市街に於ては風によりて煤其他塵埃等を吸入す乾燥せる野邑の降雨は最も汚れたりと云ふ、雪は汚物を含む事稀なり如何となれば固形躰を以て降下するによれば汚物の侵入する度少なし、故に雪の溶解せる水は雨水に比し純潔なりと云ふ然れども味其最も淡し、雨水と雖も霖雨は汚物の淹滯少なく唯だ蒸溜水との差は斯の天然物を吸收せると其然らざるとによれり。

○悪しき空氣小供を殺ろす　社の小僧

悪き空氣は小兒の死によりて證することが出來ます、アイルランドの家は兎角空氣が腐敗しやすい故に子供の三分の二は十二歳になる迄に死でしまいます、ある病院で試驗をしました悪い空氣のうちに子供を置た時は大層多く死にましたが新しき空氣中に入た時は死ぬ者の數が減じました、教育ある母も教育なき母も新鮮の空氣を小兒に呼吸さする時には毒の樣に考る人がありります、眠る時も肩掛や毛布を以て大事に包み新しき空氣に觸ぬ樣にし其死を早める樣にするのは天の賜を其儘受させぬ樣にするも仝じことです。

三歳計りの子供が林檎の木の下へ來て、私が林檎を取つたらさぞ痛いだらうねー私は打たれてもいたいけれども御前は啼きはしまいねー、林檎の木はイーエ何で啼く者ですか小供は安心して一つ林檎を取ると朝露がぱら〳〵、小供は大聲をあげて聲は出さないが涙を溢したではないか痛ければもうよしましよう。

小説

○イナック、アーデンものがたり　テニソン著　某女譯

此三人の中の一人はまだ子供つぽい若ものでしたが俄かに破船した晩に負ふた傷が基になつて、三ヶ年の間、生るともなく死ぬるともなく煩つてゐ升たが他の二人は側を離れず看病いたし升た、さてとふ〳〵落命し升て殘る二人は大木の倒れたのを見つけ升て、イナックの合手が米國の土人の仕方に習ひ、焚火で中心に穴をくり拔き、棺にするとて我を忘れて働てゐ升たが、猛烈な大陽熱に當られ、是も倒れて、イナック一人になり升た、此通りに二人まで果てるのを見るイナックは惣て神の戒めと思ひ、忍んで時節を待ふと決心し升た。

かくて日々イナックの眼に入るものは峯まで森林の茂た山に、天登る道かと疑はれる蒼々とした芝生のうね〳〵、しな好き掛巣の羽の冠、群居る鳥又虫の色どりの雅さ、見上る木々をまとふ花のはでやかさ、凡て熱帯地方の好風景は飽まで見慣升たが、さて見度と思ふいと敷人の面かげは一切見事は出來ず聞度と思ふ柔和な聲に代て耳に逼るは空を環にとぶ水鳥の叫び、沖に逆捲く怒濤の雷聲、天に聳る木々の風琴、或は海に注ぐ早瀬の音などでした、イナックは海岸を彷徨するか又は終日海に臨だ峡路に坐りながら漂流に逢た舟人の白帆を待とが切でしたが、日を日について待ども〳〵帆と思ふものさへ見えませんかつた、棕梠や裏じろ、絶壁の間に紅さす光線が旭日の前振をするや否、東の海は一面に火を焼し、其火の頂天に來ると見中にはや西の水面は是が爲に染る、間もなく天に耀く丸かな星も出で、大洋の唸も殊更耳立てくる、兎角して紅の光線が相變らず顯れるといふ様に月日は他事なく廻轉する中に待詫る白帆は一向に見え申さんかつた。

現にも夢にも物待してゐるイナックが時としては、徊廻る金色の蜥蜴が側へ寄り來までに物案にくれてゐる中にさま〳〵亂雑な妄想が自分を襲ひ來る様でもあり、又た己が戀の身を離れて、天涯の彼方なる古郷を彷徨する様な事もあり升た、小供等や其たはれ言、エニイの事、少さな住家の模様、坂にあつた通りの工合、機械場、茂つた生垣や淋敷屋敷のと、自分の引た馬、買拂つた船、霜月の寒かりし明方、高臺の晩景、静かな夕立の折節、枯葉の臭、黒ずんだ海の低い唸り聲、これらが亂れて心に浮み來升。

ある時耳鳴がする中に遠く幽かに古郷の嬉しそうな鐘を聞升て、自分に何故とも分らず急に飛上つてブル〳〵と震へ升た、そうして眼の當り自分の縛れてる、美麗なれど拗憎き孤島に心が立戻る。

淋しさは、實に此人を殺すに充分な力を以てゐ升た、併し共に語るべき人間を、つれなく寂寞に魂玉はぬ神とかたりつゝ漸くに忍んで日を送り升た。

此通りにしてイナックの早くも染むる白髪頭の上に雨降り日でりの時節が交代して知らず〳〵數年を重ねました、然るに自分の家族の顔を見慣れた古郷の土を踏む希望が、全く絶へぬ中に俄かに此寂寞な境界を脱する様になり升た、彼の好運丸に似て、逆風に吹廻され、正路を失つた船が計らず、水を汲ふとして此島に立よりました、先乗組人の一人が霞の立籠

た間隙から望んだ小島に山から落る細流のあるのを認めて、水夫を遣はし升た處が岸に漕よせて源を尋ねて走り行く途端に大發見て騒立る事が出たい致ました。と見る峡路から下つて來る人は頭髪もひげも長々と伸てあれても、人間かと思はれぬほど顔は日にやけ、衣服は異様で、白痴と見ねる様に不思議に口籠つた物いひで分らせ度そうにいらだてはいらだつほど尚まとまらず、手まねさへ何か分りませんかつた、併し鮮水の流まで人々を伴ひ行まして、水夫の中へ混つて互の談話を聞うちに、長く束縛された舌も漸く解て自分の趣意も向へ通る様になり升た、兎角して水桶を一杯にしてから水夫等はイナックを船へ伴ひ行ました、そこでちぎれ〳〵に述べる履歴を聞く人々は始こそ半信半疑でしたが段々一同に驚き且つ感動し升た、そうして終には着物を與へ升て、其上無賃で本國まで送るとにし升た、併しイナックはいつも水夫と共に働いて沈鬱の習慣を破ろうとしてゐ升た、乘組人のうちでイナックの古郷から來た者はありませんかつたから、問ふでも聞度とおもふ便りは少しも分りませんかつた、それより歸途に向ふた船は長路に堪へず、兎角長びくのがイナックにはひどくもどかしく思われ升た、そうして心斗りは惰弱な追風に先立つて、古郷へ飛歸り升たが、いよ〳〵ある朧月夜のあとに草原を越へて吹來る露つぽい英國の朝風が戀人に逢ふた時の様にイナックの骨身にゾツト染み通る時が來升た、其翌船の役人がイナックを憐んで毎々若干の金を出して彼に送り、濱邊に漕舟を下ろしたのは昔イナックが出船した港でした。

義務とは何んぞや、吾が目前に横わる一日の事務を行ふの責めなり。何をか眞政府と云ふ乎、吾人をして自ら支配するとを教ゆるもの是れ最良の政府なり。（ゲーテ）。

寄書

○文學者と法學者　　碓氷山人

凡そ事を論ずるに當り事實を集め之を歸納して一定の法則を發見せんとするには必らず先つ其事實に就て確むる處なかる可からず苟も此に見る所なくして推斷を下さば其誤謬や只に其論者の過ちのみならず遂に天下億兆をして迷路に陥らしむるに至らん之れ識者の猛省すべき所なりとす。

余は去る五日の國民新聞に於てドクトル、カイ子氏の稿に係る法學者と文學者と題する一文を讀み物か考ふる所なきにしもあらず其今日迄口を揣みて云はざりし所以のものは天下必らず其人あり國民新聞第九號に於て英文學者の例を挙げて「兎に角反對せる者に非るを（法學と文學）證するは只に獨逸のみに非ずして英米に於ける事實も之を證明するを知る」と論斷せり然れども先のカイ子氏は只に事實より歸納したるのみにして（松濱散士の云ふ如く）未た其事實に就て推論を説かざりしを以て充分の前提に據るものと云ふ可からず松濱散士も亦然り故に右兩氏の論ずる處未だ確實なりと云ふ可からず然れば兩氏が論斷せし所も甚だ模糊たるが如し余も嘗て英文學を讀み此點に就て大に不審を抱きしものなれば今兩氏に尾して左に少しく考ふる所を述べん。

余は英米文學者に就て察するに法律文學は決して關係あるものに非ずと信ず見よチョーサー、カウパー、フヰールヂング、スコット、サルヴヰング等の大文學者一時は法律を學びしと雖も皆中途未成にして之を捨てしに非ずや〃フランシスベーコンの如く勉學の資財に乏しきが爲め活計の方便に法律を學びしものありヂツケンスの如く父の爲に强ひられて一時法律を學びたるあり其他ロングフエルローと云ひホルムスと云ひトマス、ムーアと云ひブライアントと云ひ法律を學びたるは只暫時にして法律に於ては全く成る所なかりしと云ふも敢て過言に非るべし若強て成りし者の例を擧ぐればスペンサー、マコレー、ローエル等數人に過ぎず之れとても僅かに二年若くは三年間法律を學びて暫時法庭に出でしのみ決して法學者と呼ぶの價値なし斯く觀察し來れば文學と法律と並び成功せしものは殆んと皆無といふも不可なし故に以上の人々の實例に依て文學と法律は關係ありと斷定を

下さば是大早計の事と云はざる可からず余は未だ獨逸文明史を知らずと云へども思ふにカイ子氏の擧げたる實例に於ても多くは先の英文學者の例の如く法文を兼て成功せし人はなかるべし若ありとするも甚だ少數なるべし然れば寧ろ法律と文學は關係なしと云ふの甚だ當れるが如しカイ子氏松濱氏以て如何となす、抑亦世の識者以て如何となす。

余思ふに西洋國に於ては生活の方便を得るの最も容易なるは法律を學ぶにあるならん故に文學者の如きは生活の方法を得ん爲めに一時法律を修むるなるべし然るに多くは生活の方便にだもならずして法律を廢するは之れ法、文兩學の關係なき否　對せる性質を有するの證にあらずや法學を以て生活の方便となすの甚た易きは我國に於ても見易きことなりとす見よ彼の三百代言と稱する者の如き僅に譯書の二三册も讀みたるにすぎざれども未た法律者にして餓死せし者ありと云ふを聞かず其他ゆ々は學校を卒業せり何々學位を有せりといふもの多くは一夜作りの法律家のみ然に皆立派なる生計を營むハ是法律を以て生活するの容易なるが故に非ずや是西洋各國に於て文學者が一時法律に口を止むる所以ならんか尙精細に探究せば尙此外種々の理由あるべけれど上に云ふ所も亦其理由の一ならずんばあらず。以上余の述ぶるが如く若法文兩學關係なしとせば余は世の文學者たらん人に望む頗くは西洋の實例を一見して之を摸擬せんとし兩者を兼修めんとして一も取らず二も取らず所謂一擧兩損の失策に陷らざらん事を、我國の如きは文學と云ひ法律と云ひ一派の學問となつて世に行ハるゝハ西洋諸國と交通の開けし以來の事にして日未た淺きが故に法文を兼修せし實例少なからん否今日と雖も之を兼ねんとするが如き人はなかるべしと信ず余ハ將來に於ても亦之なからん事を希望するものなり何となれば余は兩者無關係の說を抱くものなればなり余は此問題に就て世人が精細に論ずる所なきを見て松濱散士と共に遺憾に思ふ者なり何となれば是日本將來の文學の爲めに大關係ある一問題なればなり世の識あり學ある人願くは此事に就て意見を吐くに吝なる勿れ。

○詩五首　　在九州　柳溪女史

嘗晚秋之候、辭所妾關之教會、赴九州之途次偶會遇莫逆之友、僅々一日而又分袂、因賦一絕爲別辭、

昨辭弟妹爲離群。別恨難銷又別君。無限秋風猶颯々。哀鴻啼渡暮天雲。

船過須磨關

鐵壁硏夢客愁多。漁火灣々照穩波。想得姑蘇城外月。月高雲帆過須磨。

一夜風浪不穩、船泊福浦灣

暗淡愁雲猶未開。海風何恨捲潮來。枕頭影冷夢難結。思到關山落古臺。

歲晚偶感

畢竟江山無變遷。人情今古轉翻々。時紛塵不汙妾骨。立見梅花寒月前。

元旦口號

千里春風萬象更。梅花數點絕塵情。南山無雨兒童喜。瑞氣浮來表泰平。

閑書

二三

○食客と獻身者との事

巖本先生、生は京都の一少年にして、姓を佐々木と呼び、衣食に奔走するの傍ら、學びの園に餘念なきものにて候、平素御高名は存し居り、心竊に先生の爲人を敬慕致し居ても、山海万里を距つる悲しさは、親しく警咳に接して御高喩を仰ぐに由なく遺憾實に此事に御坐候、生は又女學雜誌愛讀者の一人にして、彼の此の大沙漠に一人の詩人あれよてふ一文は未だ愛誦致し居候、過る二日、生は生が勤めさきなる或る用事にて、さゞ浪の滋賀に赴き候が、その京都を出づる時、或る持物の外、女學雜誌一部を携へ立ち出でたり、滋賀街道は以前も今も變らぬさわがしさ、荷車、人力車は引もきらず通ひ、あまりのうるさしきに携ふる女學雜誌、いで今日の好伴侶と、歩みながら讀み始めたり、‖薮搖論、殺人養成の庭は家族にあり‖いつもながら高潔の文字、一讀、一歩、四邊のそうぞうしさはものかは、我れ、我れを忘れて不知不知歩みしが、俄然生は歩を止めたり、而して生は悲めり慨けり、先生、そは生が‖眞美の人間を養生するは實に只た家族にあり：：吾人かの食客の長しての ち冷々寒々たる殘酷の人となるを認たむ之を父母恩愛の下に撫育せられたるの子に比較するときは、殆んど春夏に澤々滋々さゝる綠草を見て、乍ち、秋冬の枯木落葉を見る心地す而して之を見るに於て其差ひの甚しきのみならず凡そ犧牲獻身的の善美高潔なることに至りては彼の冷々寒々たる輩らの決して窺ひ得ず敢て行ひ得ざるの業なりとす：：左れば眞の人を生するの地は家族にあり‖てふ一段を讀みし時にてありし。

生が敬慕する巖本先生、もし先生の言の如くならしめば、世間幾多可憐の少年、その父母に生別し、死別し、和氣藹然たる家族團欒の眞味を知らず、天涯万里の他鄕に孤囚となり居るもの、食客となり居るもの、世海の波濤に漂ひ居るもの前途の志望を抱きて世路の崎嶇になやみ居るもの、抑も之れ等可憐の少年は眞の人となる能はざる乎、想ふに天下の廣き、少年の多き豈に如此もの少なしとせんや、而して是れ等少年の勵ますの父なく、慰むるの母なく、兄弟姉妹なく、四邊を圍繞する冷々淡々の境遇は、勢ひ此の流の可憐生を驅て、ヨシ先生が所謂枯木落葉の人とならさんとするも、枯木落葉の如くならさらんを勉むるには如何なるものに依ればよろしく候や、即ち家族なきも犧牲獻身的の善美高潔なる思想を養はんとするには如何なるものに依ればよろしく候や、生は未だ食客とはなり不申候へども、團欒の樂みなく、父なく母なく固と是れ一個の可憐生たる事は自白する處に御坐候。

不文亂筆一氣呵成更寫も不仕る不敬の罪は幾重にも御海容被下、女學雜誌にて御答へ被下候はゞ實に〱幸甚之至りに御坐候五日午后十二時京都柳馬場にて佐々木生拜。

編者答へて云く、何如にも御尤の仰せ、堯にも惡なる子あり、柳下惠にも惡兄弟あるならひ、同じ家の內でも色々の子が出來ますから、又家の外で出來るのにも色々ありましやう、が只だ槪して切論した譯で食客に温たかな人は一人もないとは申されません、たゞ大躰を痛論したとき お聞わけを乞ひます。

謹啓仕候先般は文學之定儀及び樂しき夫婦の二作に付き殊に御手厚き御解說を御掲載被下春風暖々疑氷稍融解の方向には立向ひ申候有之既御禮申上可き筈に有之候處日々の業務に追はれ心ならずも今日に及ひ申候條夫子共御方は社外の御方に候や又御社の御人に候や或は先生に候や一向不案內に候へ共兎に角身に取り冥加の事さ深く御禮申上き命こけへて樂く候夫婦の委細しき御說を願着き申候貫に私共の如く文字に緣遠き此田舍に住ひ候身に取りては御社御施行の交論は千幸万福の至りに感じられ申候付きては之れく伺ひあれも御尊れ中上度存せられ候へ共私は中生ならな學旣延は下万年のもの名さ信じられ候へば追々別ふとさ任り茲に以下の御導わ乃ち當延第聞雜誌に有名なる文學者の雅號本姓大凡その年肥等御示し被下候へば有極雖き次第に御樂候尤も御拆面の中にも一讀者の御答へに慮無附云々さ拜りり予之妙小妹存せられ候へ共いがに慮無附なりさて年が年中笠な秘り稽くることも有之出數るに御社北邸散士の小就家貴任論な評され候如く術も多情高潔なる以て讀者に見ゆるが文學者の本心に候ならば態々本名を隱す入用も無之るべき樣にも思ひ及されで候然し御高心の過更に計り稽く候へば一讀者へ御答更に御無理さ申上す候去れど兎に角此編笠のため隨分多情高深の出無附共人さは受取れぬ先生が多ひは中實の樣に存居中候御一贊の深を下さゝ候へば簡分卑見も御目に入れ心候へ共教師に對ふ生徒由なき業と思ひたしなみ中候[illegible]し年ら國氏新聞の廊下處の術如き典に候れたろもの名をゝつて斷編篋ゝ隊より慮な衛く如く父院外先生の術箱架下の孤迹先生に對するろ仙人のまだ素人の評へ御社の障ゝ先生もちさ頻似の言を以て試計せらろゝ採に候へ共しかさ私には目が精袱候へば之しは取脫けさ仕り）思案外史の如く名よりは贊て押出せさ編笠も最深ふ手習新聞にまで御手か廻さゝろ杯之れさ云ひ彼にさ中し自綸チ編で抑出るはまたしも絞りの頻手拭所簒げて顯ハるゝへも深山に見へ候へパ此時に當りて雅器本姓年齢の大凡を承ね致置候ハ而白きよりも中々綜あろことゝ存せられ斷くの如き次第に御座候幸に一々御示し被下れ候へパ滅多にふへに誰されて手の內ハ出さぬ幸にも及ばれ可申く候恐惶（伏見子）。

島歌散史　紫野史　笠園主人　仰天子　秋城士　花村居士　迷花居生　錦簑逸人

乙葉仸主人　柳浪子　其の川子　藤屋主人　蝶の舍主人　蜂陸隊士　屑山人　愛鶴軒

湖處子　參太　木導　松羅常主人　竹柏園女史　若松しつ子

編者答て云く、追つて取調べお答を致し升す、然し、雅號を初めて伺ふ方すらあります、御承知の方は成べくお知らせを願ひ升す。

〇女學雜誌の一失　方內齋主人

女學雜誌の好雜誌たるを余の言を待たず豈に啻に令閨淑女を益するのみならんや男讀者と雖も益し以て己を利すること鮮少ならざるなり、記者先生或ハ男子の讀むを欲せざる（し）然りと雖も惜むべし余を以て之を觀るに女學雜誌一失あり曰活字の微細なるにあり毎號終りの三四枚たるや文字小さきに失し視力を勞すること甚だ大なり嗚呼美芳野舍の君よ何んぞ一言是に及ぼさゞる余ハ愛ふ后年日本の母女學雜誌の爲めに多く近眼を患ふるな。

編者答へて云く、如何にも仰せの通り、私供も字を大きくすれば夫れ丈け勞な減ずるわけにて候へど、紙數を何如に殖すとも追々さし載せたきもの現れ來り喩へば機を解んとして孤舟に乘んを爭ふもの多きの樣にて平家の武者の如くすがる手を長切つて滿川手首斬み乘せる程の勇氣もなく扱ては不得止斯樣相成本御憫察ねがはしく候。

文論

●清水金蠅　外國のホームの有樣を知るには矢張り小說が宜しひと思ひ升す、然し特にホームの事を書いたものもあるです、獨逸のはゼルマン、ホーム、ライフ。佛蘭西のはフレンチ、ホーム、ライフと云ふ書が有り升す、一圓九十錢と一圓二十錢で買へます。

●一學生　八宗兼學と申すこともあり升たが、今日の時勢到底一つにきめて專門な深く御勉強あるが宜しひと存じ升す、西洋の語に三學二學一學と云ふことがあり升、三學を兼しはシスロ、ベーコン、ブルーハムで、二學に達したは政治と法律に於けるサーロー及エブスター、文學と政事に於けるグラッドストン、デスレリー、の類で、其他古今に有名なるは皆ふ一學です、ジョンソンも、ゲーリツクも、レーノルドも、シエクスピアも皆左樣です、兼學で名のあるのは少なくござらうか其一方で秀でるのですから、ツマリ他の一方に力を裂く丈が損となります。

●乙女さま　桃青も芭蕉も同人です、支考、其角、嵐雪、許六の類皆芭蕉の高弟です、丈草、千那、李由の三人は皆僧ですが何れも蕉門に入て學んだ弟子です。

●西京同志社大澤樣　東京官立私立女學校の生徒數昨年に比すれば無論增て居りまするか新に入校した生徒は去年夏比より頓に減じた樣で、之は例の風評と、不景氣と、流行の少しく冷めて國粹論の地に根ざしたとに由ると思ひます○普通學を教授する學校と女子の技藝を教授する學校と比較して何れが盛んの問、兎に角職業的の學校は府下に漸やく二つ三つで生徒も二百を越すは少なきに普通的のには二百五十位のが數多あります、惣へて職業教育の必要はまだ十分に分つて居らないやうですが、然し府下に於ては到底免れぬ勢ひでありましやう○女學生の多數は高尚なる學科を修め得る哉又通例の教育を受るを以て滿足の樣子なるやの問、宣教師の女學校では隨分高等の女生があります、其學力は概して高等中學の卒業生位ひ、英文學は大學の卒業生位ひのが隨分あります、シテ大概は高等教育を受るを滿足と致す氣風です（現今の女學校英學の學科程度に付府下の教育家が適否を論ずる何如んの問、大抵皆な高すぎる多すぎると考へて居ます私等も左樣に信じ追々英學を減じたく存じます、然し森子死して榎本子は寧しろ實業的誠文學的のお考ですから、之からは反つて反動に出る大勢を生じましやう。

●T8生に　古今小說十種のお問ひ、併し人に由て嗜好は異なるが故に何人が見ても面白いとは言ひ難けれど先づ小生は、馬琴の八犬傳（出版月評第三、四、五、七、八號依田學海翁の批評と合せ見給ハヾ味ひ一層ならん）、夢想兵衞胡蝶物語、矢野文雄氏纂譯の經國美談、關直彦氏譯述の春鶯囀、尾崎庸夫氏譯の繫思談、二葉亭氏著の浮雲、湘川漁夫氏譯の心の浮諸（女學雜誌第百四十五、百四十六號）、東海散士の「佳人の奇遇」に對する「才子の不遇」（明治廿一年七月頃の大坂朝日新聞續き物、作者不詳）、美妙齋主人の「胡蝶」に對する「阿姑麻」（明治廿二年二月頃の東京朝日新聞に連載せる霞亭主人の小說、文章としては余最も此種を好む）、等は手之れを措く能はず幾回繙くも更に厭く事なく――尤も批評家の眼より見れば欠點あるにもせよ――讀で益々味ひ深きを覺ゆ、此外「一讀奇書新日本驚天動地不遂名」是れぞ即ち尾崎行雄氏の一著書なり（天牢囚氏）。

時事

○佛教家及廢娼運動

佛教家中廢娼論に反對するものあるとを聞き、一は慨歎し一は佛教の爲に惜しみ居りたるが、教裏眞誠の志あるものは左樣にては無きとと見え、此度び一二の有志者發起して遂に佛教不邪淫會なるものを起したるが、去九日府下麟祥院に於て非娼演說を催うし、出席辨士左の如くにてありし、

平松理英　中山理賢　土岐善靜　中村忠直　岩堀智直　本多眞觀　鍋島珪草　森莚吉　加藤熊一郎　春日圓讓　丸山德悟樓　小島官吾　堀内靜宇　大服幽明　原坦山

廢娼問題の如きは總べて社會改良に志あるものゝ皆な同心協力すべきものあり、安んぞ宗教により職業によりて其責を異にすべきものならんや、而して今や此運動に盡力するもの只だ基督教家のみに限らず併せて佛教家を得たり、吾人は廢娼事業の爲に万歲を祝せざる可らず。

○下宿事業

府下十万の書生の爲に潔白淸快なる下宿屋を設くるは矯風上至大の美事業なり、歐米に於ける篤志の貴婦人令孃は、酒店若くは宜しからぬ茶樓に對して特更に淸淨親切あるコーヒー店を設け、又所々に博愛にして禁酒を主義とする下宿屋を設け學生の爲に淸き爽快を與へて美なる留學境の第二ホームを作り、間接に其の遊蕩に陷いるとを防ぐものあり、社會改良の爲には有益なる事業にして且つ慈善婦人の爲には尤も好適なる事業と云ふべし、小島官吾氏の令夫人淸子は篤信なる基督教信徒にして夙に此事業に志あり、近日將に其計畫に着手し先試みに一小舍を設け追々之を擴張せんとを望まるゝよし。

○授產事業

府下南豐島郡角筈村に在る女子獨立學校は、樺山子爵夫人、種田成子、加藤とし子等の發起設立せられたる者にして、主として女子に獨立の職業を與ふるとを企圖し、就學中手を以て働らき且つ口に書を誦するの仕組に制し、現に入學生數十名あり、大抵自活習學すと云ふ、而して今度更に六十名の通學生を募り、來る第四土曜日に鹿鳴館に於て義捐會を催うし、音樂及島田三郎氏の演說に據りて義捐金を募集し、彌よ校務を擴張せらると云ふ。尙佐々城豐壽潮田ちせ兩女史の發起に係る女子授產學校も、女敎員一名既に米國より渡來し、大隈伯夫人金百圓を寄附せられ、學校設立の規摸既に略定すと云り。此等の起業率ね婦女子の獨力を以て新學校を設立する者にして、而して皆慈善上の奮發に發し重に憫むべき貧女子を救ふが爲にあり、有髯男子廢娼事業の爲に更に興奮盡力して可なり。

○衛生事業

婦人衛生會員は、從來三月一回の衛生雜誌を發行し、且つ月々衛生演說會を開き、特更に平民主義を執りて專ら中以下の社會に衛生の風儀を傳道したるが、之にては尙ほ物足らずと感じ、來三月より雜誌發行の度數を增し、一層婦人衛生上の事業の爲に盡力せらるゝ由。

○矯風事業

婦人矯風會員は、事業上いよ〳〵活潑敏捷を要し、矯風事務總躰を十二部に小分し、特に當分之を中合して六部と爲し、各部長各々其方面を擔當して益々熱心に矯風事業に力を盡さるゝの計畫あり、會頭矢島かぢ子再三推撰せらるゝと云へども病により再び就職せざるを以て止を得ず新會頭撰定に決し、本日此等規則撰擧確定の爲に総會を開かるべし、而して略定したる六部の分ち方は概ね左の如しと云へり、

禁酒部　教育部(文書、教育)　政權部
慈善部(救恤、傳道、授産)　衛生部(衛生、禁煙)　風俗部(廢娼、家政、風俗)

○縫箔ハンケチ

近年婦女子の職業にして新たに起りたるは縫箔ハンケチの細工なるが、倫敦に在る日本領事館は、去十二月廿一日附の書信を以て左の報告を寄せたる旨、官報に見ゆ、

英國に於ける日本製絹手巾の景況　日本より當英國へ輸入する絹製手巾は一兩年以來大に其數を增せし趣きなれども其增額何程に達せしやの點に至りては英國稅關輸出入表に手巾のみを別記せず一般絹製品の部に混入しあるに因り其正數を知ること難し然れども輸出入表中絹製品(Silk Manufactures)輸入額の十分の九以上は絹製手巾なりと言へば之に依りて輸入增減の一斑を知るに足らん今絹製品の輸入高を調査するに二十年は二萬七百二十磅、二十一年は三萬二千九百七十三磅にして尙ほ引續き本年(二十二年)も多額を輸入せし趣きなれば絹製手巾の輸入高も增せしこと疑を入れざるなり然るに同品の商況は今日にては當業者に取り薄利の商賣と爲り且つ現今在荷過多なるため不味の景況を呈するに至れり但し今後景氣恢復の望絕えたりと云ふにあらず又當時手巾中重に賣買あるものは白無地折返縫緣(ヘムスチッチト)品に止るものゝ如し其他稀には淡白なる縫箔等を施せし品も賣口あれども其數極めて少なし手巾は賣買上季節に依り格別繁閑の差異なしと雖も夏季は幾分か捌口宜し又或る當業者の說に據れば今後日本より多くの劣等低價品を輸出するに至らば他國は知らず英國人は必ず之を嫌惡し終に其販路を退縮せしむるに至るべしと云へり。

然れば重に此業を目途とする女子授産家は、今后大ひに用心する所ろなかる可らず。

●廢娼記事

●●京濱　廢娼壯年義會の會員も勸告書を印刷し廣く遊蕩者に配布せんとす○去三十日橫濱住吉町會堂に於て佐々木笑受郎、寒田鈍痴、相川富三郎三氏の演說あり○不邪淫會の事別項に揭げたり○來る廿二日は番町教會に於て女子靑年會の發起により田村直臣、星野光太、古莊三郎三氏の演說あるべし○前號に記したる如く靑年一百餘名は去十一日大運動を催うし吾妻々の中廢娼万才を唱へて市中及遊廓を廻れり。

●●●廢娼演說　愛知縣の志士鈴木盛公氏は舊名古屋藩士なるが佐幕の爲め戊辰の際朝命に依り死を賜りたる人々の紀念碑を建んとて發起總代の資格を以て寄附金募集のため上京中なるが滯在中芳原及洲崎近傍に於て廢娼演說を獨身にて開會せらるゝ由。

●●●●●●兵庫縣廢娼同盟會　去一日私立頌榮幼稚園にて發會式執行す、創立員牧龍太氏開會の趣意(就立趣意)書、創立委員報告等を朗讀し、次に奏樂中會員を募集し、次に島中正行、吉川亀、根本正三氏の演說あり、次に奏樂中安永嘉氏創立費を募集し、次に木山金太郎、河村正雄、阿部政恒の三氏祝文祝辭を讀み、畢て議事を開く、現今會員二百二十名斗り內四五十名は明石より入會せりと。而して近々根本正、植木枝盛其他愛國公黨の人々に乞ひ廢娼大演說を催うす由。

●●●越后國　同地にも廢娼同盟會起り、左の五則を議定したり、
一　再會は公許娼許を禁止するを元期す

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

二　吾曹は廢娼同盟と稱す

三　廢娼運動の第一着手として可成く僅少の期限を以て公娼全廢を縣會に向つて建議する事

四　縣會にして建議を採可せざる時は幾回幾年を經過するも解散せざる事

五　吾曹は各地廢娼會に統路を通じて運動する事

●大坂●●　大坂存娼會の奇怪は前號にも記したるが乙部取締の宇野正則氏はいろか新聞を娼●●●●●論の機關となさんと盡力中のよし廢娼論の影響いよ／＼現はれ來る。

●名古屋の建議　名古屋の有賀武雄氏外八名は去七日廢娼の建議を縣會に提出したる由なる其の細目は左の如くなりと云ふ。

第一　本縣下の娼妓は今より五ヶ年を期して全廢する事

第二　今後娼妓營業出願者を許可せざる事

第三　現在の娼妓は其負債を償却し了ると同時に廢業せしむる事

第四　現在の娼妓をして其の負債を増加せしめざる爲め適當の取締法を設る事

第五　今後妓樓の増築を禁止する事

第六　娼妓の絹布を着るを禁止する事

且つ同地にては新に廢娼新聞を起すの計畫あり。

●廢娼論料

平岡希擘

婦女子授產の事

一、婦女子の欠乏

殖産の業日々進歩するに隨て我邦全體工業も盛になれり殖産の進歩するは自然閑人を少くする一の手立なり彼の橫濱の茶業宇治の茶業は果して幾千の人夫を要するものぞ中にも婦人に就て最も需要あるは蠶業事件ならん宮城山形福島群馬山梨長野三重崎玉の諸縣の如き蠶業は人民の糊口富有の元資たり而して就中最も大分を占むるものは長野縣にして全國蠶業の七分の一を有せりと云ふ斯く蠶業の大なるより製糸の業も盛大にして之れか爲めに要する工女は幾何ならん縣下にて製糸の最も盛なるは諏訪にして大小の製糸場百に充つべし工女の數二千五百に餘るべしと聞けり他國より雇ひ入れらるゝもの甚た多し茲に又下伊那飯田町邊も熱心家來ければ製糸場追々盛大となり婦人を要すると甚た多し近頃諏訪よりして工女雇入れの爲めに四方に出て縮緬の羽織杯を禮物とするより飯田町邊の工場の工女餘程奪はれたり之れ等の爲め年頃則ち十五六より二十才位の婦人は甚た乏しく東京の如き閑人あることなし彼の湯島上野淺草芝其他兩國の近所等には何の藝もなく髮や顏を飾り付け客に媚ぶる婦人多きを夥しく女學雜誌の究論を見ても雇はれ度方數々あるは實に當地の羨む處にて當地方には絕へて斯る婦人なしと云ふも可なり先つ製糸場の有樣は衣食自分賄にて毎月三四圓より十圓位迄なり通常の婦人には上等の給料なりと申すべし又年寄りの婦人妻君方の仕事には元結下を撚ふとなり元結は女學雜誌にも一寸見へたるが彼の說は誤りにて結髮者の多き爲めに盛なるにあらず光澤色元結と申して細大數種ありて長さは三四丈物品を束ぬる糸の代りに用ゆるものにして外國輸出用のもの中にも多し、扨て右樣の次第なれば當地方は市中も村落も婦人の需用大にして相爭ふて一人の婦人を右左より引き取るか如く前金にて契約するものも數ありなれば思ふ今日無益の婦人有害の婦人則ち娼妓を全廢して之れを工場に用ゆるならば非常の益あるべしと併し又一言せねばならぬは工場の取締完全ならねば今日の所にても工女の不品行多く諏訪の夜の如きは見苦しきものあり工女のみならず工場に關する男子の行の宜しからぬと工女と云々は至る所に見受けらるゝとなれば況して熟錬家を雇ひ入るに於ては却て殖産上の害となるも知るべからず然し善き監督を加へなば隨分有難き仕合ならんと信す。

二、飯田の廢娼妓論

珍聞奇報少なからねども盖し飯田の廢娼論程奇怪なるはあらぬべし昨冬廢娼の與論を起せしより波風荒く至る所を搔がせたりしか天下大勢の趣く處廢娼の說止むべからず民心大に之れに注けり而るに信州上田に於て起りし廢娼論は四方より起りしにもあらずクリスチヤンより起りしにもあらず堂々たる妓樓より起りしなり餘り珍らしければ正しき人より聞き正せしに近頃妓樓々主の有力者の集會にて突然と廢娼論起りて討論の末宜しく本年四月の縣會に建議すべし其の代りには今より三四年間は減稅或は無稅を願ひ上け三年或は四年の末には妓樓全廢すべしとのとなりと吾人は實に驚きに打たれたり三年或は四年の猶豫は勢止むべからざるとなれば譬へ善事は急げにせよ火急の事は望ましからず只だ予れは當局者其人の自ら其の非を知り大膽にも發言せしを稱贊せざるを得ず思ふに樓主とて仝しく良心を具ふる人間なるからは日本至る處の妓樓主人一人として正邪善惡の區別を知らぬものあらざるべく又一人として正を正とし善を善として自ら嘉し邪を邪とし惡を惡として自ら惡むに相違なかるべく又た娼妓を蓄ふの業は正善嘉すべき業なりとは思惟せざるなるべし左れば日本全國の妓樓主人吾が愛する仝胞姉妹を賣買露に濕れしめて不潔苦勞に沈ましむるとなく志士仁人日本公義の人たるに恥ぢざるが爲めに自ら其の業を捨つるは最も愛すべく最も賞すべき事柄なり捨てよ棄てよ蓄娼業者淺の爲めに勵めよ妓樓主人。

三、工場の取締

工業盛なるに隨て工女を要する事の衆多なるは理の然らしむる處にして今日已に工女に欠きを告ぐる有樣なり此の時に當りて各工場共に工場取締を正しくせざるべからざるは勿論なり吾人は今日工場不取締の爲めに悲慘なる恐懼すべき忌々しき不快からぬ結果を見ること往々にして殘念無念常に嘆息する處なり故に今日世上の考にては工女と云へば浮氣か飛び上りか驛斤か漂泊者の如く思ひ工女其の人も工女となるからは浮氣とならざるべからず飛び上りとならざるべからず恰も田舍者か兵隊となる上は粗暴亂雜大酒とならざるべからずと思ふて自ら身を壞るが

如く自ら身を輕卒にする工女少からず扨ても哀れなる最とも嘆くべき事ならずや予は蚕糸業の隆盛なりし各地を見舞自ら工塲を巡り視たりしに成程製糸製絹の業に熱心なるには感服したりしが工女の浮氣なるにも感心せり追々情實を聞き正せば不潔なる影暗き所行甚だ多し斯の如くしては到底殖産の美業起るべくも思はれず予數々好て蚕業家に交はり談話せしに皆言ふ蚕業家の不品行は珍らしからぬとなり酒と婦人は交際上是非伴なばればならぬもの、如き默々の成規ありと實に慨かはしき話ならずや日本殖産家の爲めに泣かざるべからず願くは然るべき方法を以て工塲取締を正し役員は勿論自ら品行を嚴にし潔白溫和の中に全備なる日本殖産を見たきものなり。

然し中にも富岡製糸塲の如きは前後行き届きたるものと云ふべし之れも私有物ならぬ結果と申すへし玆に感ずべきは米澤士族の所有に屬する米澤製糸塲の取締なり予は二三回之れを訪ひ今又聞く處に由るに米澤製糸塲は北方に有名なる大工塲にして終年開業す工女殆んど二百六七十名吏員とも合せて三百有餘人工塲も清潔製糸も最良なり當工塲は毎月一の日休業のみなれば毎月三回のみ此の三回のみは工女の外出日にして他は工塲内の寄宿舍にあり午前は六時より午後六時までを先づ工事時間となし夜は十時まで幼者の爲めに學校を開き一通の讀書習字數字を授け壯者には文字の外裁縫を教へたり又休日の夜とても門限七時なれば工女の夜行する如きとなし左れは工女數多あるにも拘はらず工女を見ると實に稀なり近頃丸山氏社長となりて毎月三回キリスト教徒を招て訓戒せしむる由斯の如き有樣なれば工女は務めて賃銀を得るの外文字裁縫を知り得高尙なる德義を聞くを得て其入自身の幸福なるのみならず親たるもの、安心工塲の整頓隨て事業も進歩するなり何卒四方の工塲悉く斯くあらまほしき事なり。

女報

○婦人衞生會　來月一日飯田町四丁目共濟會々塲に於て總會あり、加藤弘之櫻井郁二郎宮本仲諸氏の演説あるよし。

○同志社の爲めの演説會　來る第四土曜日府下各青年の催しにて厚生舘に演説音樂の會を催ふし、加藤弘之、元良勇二郎、平岩恒保、井深梶之介、德富猪一郎等の演説あり外に琵琶チルガン等の奏樂あり切符は民友社及び晉社に於て賣捌くべし。

○山縣伯爵夫人　は去る七日午后二時より五時まで各大臣及勅任官各國公使等の夫人へ官邸に於て茶菓を供せし由。

○高等女學校長　矢田部理學博士は同校長兼任を免ぜられ小中村文學博士之に代はらる、やの風説あり。

○田中伊與子　田中警視總監の夫人伊與子は近時麹町區飯田町の馬術練習所に於て頻りに馬術の稽古を爲さる由なり。

○東京產婆會　去月廿九日京橋區役所に於て同會の月次中會を開きたるに出席員百餘名ありて醫學士相磯造氏は會員の質問に依り姙娠末期出血の所置胎盤不正物附着の診斷法及分娩前後下肢に於る浮腫の處置を說明し夫より醫士中村鉄次氏の腟の洗滌に用うる石炭酸水に就て演說ありし由。

○高等女學校教員檢定委員長　帝國大學總長渡邊洪基氏は去る八日尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員檢定委員長外山正一、菊地大麓、服部一三、高嶺秀夫、江木千之の諸氏同檢定委員を命ぜらる。

○外國婦人職業學校に入る　赤坂門內女子奬勵會員なる英國婦人兩名ハ去る四日一ッ橋外の女子職業學校に入學し即日縫取の科に就きたりと云ふ。

○女子技術學校　芝區新堀町の女子技術學校にてハ去る一日假開校式を執行し校長淸原英之助氏開校の趣旨を演述し次に同氏の口譯にて伊國法律大博士パテルノストロ氏の伊語演說等あり內外の來賓無慮百六十余名ありて頗る盛會なりし由。

○產婆學校　江州甲賀郡水口村の朝日環氏が發起となり同地に一の私立產婆學校を設立したしとて去る六日同縣廳へ願出でたり。

○万國監獄會議　來る五月晉國セントペートルスボルグに開く同會議に我國よりも委員を出し且つ囚徒の職業品をも出さんとて用意中の由。

○大日本帝國水難救濟會　是迄讃岐多度津、與島の兩救難所を設けたるが奏効多きに付今度更に同國阪出引出の兩所に更に救難所を設けんとす。

○淸國公使夫人の發起にて京濵在留の同夫貴婦人を會し婦人會を去九日に開き黑田伯夫人も來會ありし由。

週報

○官令　四日勅令第八號を以て文官試驗の件同第九號にて郡區長任用の件同第十號にて巡査奉職滿五年以上の者を警部警部補に任用する件を裁可公布せらる●七日法律第五號を以て備荒儲蓄法中改正の件を裁可公布せらる●八日法律第六號を以て裁判所構成法を裁可公布せられ實施の期を明治二十三年十一月一日と定めらる

○宮庭　四日天皇陛下內閣へ臨御●十一日宮中に於て紀元節御祭典御執行あらせらる

○政治　四日內閣會議に山縣總理大臣を始め西郷、松方、山田、榎本、青木各大臣參集せり同日樞密院に於て會議を開かれたり同日元老院に於て備荒儲蓄法改正の件に付第一讀會を開かる●五日元老院に於て海軍刑法改正の第三讀會開かる●六日元老院に於て北海道水產稅則中改正案の第一讀會を開かる●七日內閣會議に山縣、山田、松方、榎本、青木、岩村の六大臣參集せり同日元老院にて治罪法改正の第一讀會を開かる●八日元老院にて明治二十二年度會計特別整理の第一讀會を開かる●去る十日松方、後藤兩大臣も臨時に內閣へ出頭して協議を爲したり同日元老院に於て市町村制及土地收用法に關する訴訟取扱の件第一讀會を開かる

○外交　伊國公使は去る五日外務省に出頭し青木同大臣と別室に於て數時間密談ありたり●六日佛國公使は抹茶會を催して內外の貴婦人を招待せり

○會社　日本鐵道會社にては去る三日向島の八百松樓に於て懇親會を開きたり同日中央茶業組合會議開かる●五日京橋區木挽町商工會議事業に於て株主總會を開かる●總武鉄道會は去る五日臨時會議員會を開きたり

○新誌　豫て發行停止中の無遠慮は去る四日解停せられ去る一日發衍の新日本は去る四日停止せらる●東西新聞の大岡氏に係る賄賂事件の上告は去六日大審院に於て棄却せらる●兵庫縣下の日本魂と題する雜誌は去る六日發行停止を命ぜらる

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

廣告

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良なり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

石版 **額畫附錄** 預告

去二月八日發兌のいらつめ第四十一號には狩野良信氏揮毫の**鳩の圖**（着色大石版額畫）を掲載し、また二月十五日發兌のいらつめ第四十一號には**米人**はくエッと氏揮毫の**浮世**の苦しみといへる石版密畫を載せますはくエッと氏の畫は勇壯悲哀、**狂**濤猛風の中に**漁夫**か**死**を捧げて網を投する圖です

右いつれも最精の石版畫に鏤め額にして保存の出來るやうに爲ました右何れも其號の雜誌の附錄です、いらつめ一冊價郵税共金三錢

東京神田平永町

成美社

次號二月十六日發行

みやこのはな

第卅二號 明治廿三年二月二日發行

目錄

●いちご姫……續き……美妙齋主人
●竹間善文……續き……學海居士
●號外附錄……續き……澁柿園主人
●寫眞鏡……續き……麴亭主人
●室の早咲……續き……松江釣史
●白浪……霞山人

挿畫

●禪者美人と甚を語る……小島勝月
●自ら殺さゞると一間……鮮齋永濯
●敢取ず入來る母が室……大蘇芳年
●船の中にも白浪あり……松本楓湖

發行所

東京日本橋區本町三丁目拾七番地

金港堂

通信女學講義錄 第二卷

二月十一日發兌

價金三十二錢 全國一般無郵税

麴町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

十字屋は日本基督教書肆の鼻祖なり

基督教に關する書籍一切の目錄郵券二錢を以て呈す

婦人枢要之書籍

○高橋五郎先生論述 巖本善治君序文 **女權新説** 美本 金十五錢

○マストルチファーレッ田村直臣君著 **童蒙道志るべ** 上製金五十錢 並製金四十錢

○米國グラテン氏著 伊勢時雄先生譯 **基督信者要性** 洋裝金十八錢

○博士カクラン氏著 佐藤顯理先生譯 **舊約聖書神學** 洋裝金三十錢

○明治學院教授田村直臣先生著述 **米國婦人** 美本 金三十錢

郵税は弊舗にて支辨す

十字屋書肆
東京銀座三丁目二番地

十字屋書肆は信切と勉強を旨とす

規模を擴張し爾日を一新し以て愛顧の諸彥に便にす

中島湘煙女序 安東松二郎著

慈善叢書 **貧兒の教育**

價金五錢五厘 郵税二錢

(貧兒の教育)第一章(貧兒教育の主意)第二章(教育の有無と犯罪者との關係)第三章(吾か邦普通教育の現狀)第四章(貧兒教育の方法)第五章(愛憐の美德。貴婦人令孃方に望む)第六章(結論)

同感の貴婦人令孃方並びに慈善家教育家諸君の愛讀を希望す

賣捌所 麴町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

注意社告

本社賣捌 **女學書目錄**

入用の御方は郵券二錢封入申越あれ

發兌					
二月。	一日	八日	十五日	廿二日	
三月。	一日	八日	十五日	廿二日	三十日
四月。	六日	十三日	二十日	廿七日	

定價		
一册。	六錢 郵税。五厘	(但府内無郵税)
十册。	五十八錢郵税。五錢	(同前)
半年分	一圓四十三錢	府外は 一圓五十六錢
一年分	二圓六十錢	府外は 二圓八十六錢

廣告			
一行	一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"Jogaku Zasshi."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,56 six month *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 1B. Fujimicho 2chyome, Kojimachi, Tôkyô, Japan.

明治二十三年二月十四日印刷
明治二十三年二月十五日出版

東京麴町區富士見町二丁目一番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐